

鈴鹿工業高等専門学校				総合イノベーション工学専攻 (環境・資源コース)				開講年度		平成30年度 (2018年度)						
学科到達目標																
本プログラムは、高専教育の特徴である早期7年一貫教育により、主となる専門分野（機械、電気・電子・情報、化学・生物、材料）の知識に加えて、中京地区の伝統的特徴である素材から工業製品に至る“ものづくり”に必要な生産システムに関する工学基礎知識、豊富な実験技術および新たな価値を創り出すことができる力（*注）を身に付け、国際的に活躍できる実践的技術者を育成する。 本プログラムの修了者は、以下の姿勢・知識・能力を身に付けている必要がある。 （*注）社会のニーズに対応して有用な製品や良質のサービスを実現するため、習得した知識・技術をもとに自ら進んで、技術的諸問題の解決や新たな“ものづくり”に取り組める能力 (A) 技術者としての姿勢 (a, b, e, g) ＜視野＞ 自己と世界の関係を理解し地球規模で物事を眺めることができる。(a) ＜技術者倫理＞ 生産により生じる環境と社会への影響を認識し責任を自覚できる。(b) ＜意欲＞ 習得した知識・能力を超える問題に備えて、継続的・自律的に学習できる。(e, g) (B) 基礎・専門の知識とその応用力 (c, d, e, h, i) ＜基礎＞ 数学、自然科学および情報技術の知識の内容を習得し、それを活用できる。(c) ＜専門＞ 基礎工学および主となる専門分野に加えて、生産システムに関する専門工学(生産・素材・計測に関する工学ならびに知識に関する工学)の知識を習得し、それを活用できる。(d) ＜展開＞ 習得した知識をもとに創造性を発揮し、協力しながら仕事を計画的に進めまとめることができる。(c, d, e, h, i) (C) コミュニケーション能力(f) ＜発表＞ 自らの取り組む課題に関する成果・問題点等を論理的に記述・伝達・討論できる。(f) ＜英語＞ 英語による基本的なコミュニケーションができる。(f) 注：文末のアルファベットはJABEEの基準1(2)との対応関係を示す。																
科目区分		授業科目		科目番号	単位種別	単位数	学年別週当授業時数								担当教員	履修上の区分
							専1年				専2年					
							前		後		前		後			
							1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q		
一般	選択	物理学特論		0001	学修単位	2			2					仲本 朝基		
一般	必修	環境保全工学		0002	学修単位	2			2					甲斐 穂高		
一般	選択	グローバル・リーダー論		0003	学修単位	2			2					田添 丈博, 近藤 邦和, 山本 智代, 西岡 慶子, 大井 一徳, 瀧本 和彦, 齊藤 正美, 渋谷 修太, 市坪 誠		
一般	必修	技術者倫理		0011	学修単位	2			2					横山 春喜, 田 春一, 打田 憲生, 山口 正隆, 鶴田 忠志, 藤井 淳司		
一般	必修	技術英語Ⅰ		0012	学修単位	1	1							Lawson Michael		
一般	必修	応用情報工学		0013	学修単位	2	2							田添 丈博		
一般	必修	代数学特論		0014	学修単位	2	2							堀江 太郎		
一般	必修	数理解析学		0015	学修単位	2			2					菊池 翔太		
一般	選択	実践工業数学Ⅰ		0016	学修単位	1	1							箕浦 弘人, 白井 達也, 打田 正樹, 柴垣 寛治		

一般	選択	実践工業数学Ⅱ	0017	学修単位	1	1							兼松 秀山 行口 雅裕 和田 憲幸	
一般	必修	信頼性工学	0018	学修単位	2	2							民秋 実	
一般	選択	インターンシップⅡ	0022	学修単位	4	集中講義							田添 丈博,近藤 邦和 山本 智代	
一般	選択	インターンシップⅢ	0023	学修単位	6	集中講義							田添 丈博,近藤 邦和 山本 智代	
一般	選択	国際インターンシップⅠ	0024	学修単位	2	集中講義							田添 丈博,近藤 邦和 山本 智代	
一般	選択	国際インターンシップⅡ	0025	学修単位	4	集中講義							田添 丈博,近藤 邦和 山本 智代	
一般	選択	インターンシップⅠ	0026	学修単位	2	集中講義							田添 丈博,近藤 邦和 山本 智代	
一般	選択	長期海外インターンシップ	0027	学修単位	12			12					田添 丈博,近藤 邦和 山本 智代	
一般	選択	英語表現論	0028	学修単位	2	2							古野 百合	
一般	選択	海外語学実習Ⅰ	0029	学修単位	1	集中講義							海外語学実習 担当教員	
一般	選択	海外語学実習Ⅱ	0030	学修単位	2	集中講義							海外語学実習 担当教員	
一般	選択	海外語学実習Ⅲ	0031	学修単位	3	集中講義							海外語学実習 担当教員	
専門	必修	特別研究Ⅰ	0004	学修単位	8	4	4						特別研究Ⅰ 指 導教員	
専門	必修	総合イノベーション工学 実験	0005	学修単位	2	1	1						田添 丈博,近藤 邦和 山本 智代,西村 一寛 箕浦 弘人,山口 雅裕 黒飛 紀美	
専門	コース 選択必修	分子生命科学	0006	学修単位	2	2							山口 雅裕	
専門	選択必修	有機化学特論	0007	学修単位	2	2							淀谷 真也	
専門	コース 選択必修	移動現象論	0008	学修単位	2			2					船越 邦夫	

専門	コース 選択必修	エネルギー移送論	0009	学修単位	2	2									藤松 孝裕	
専門	選択	制御機器工学	0010	学修単位	2	2									横山 春喜	
専門	選択必修	非破壊検査工学	0019	学修単位	2			2							末次 正寛	
専門	コース 選択必修	流体力学特論	0020	学修単位	2	2									近藤 邦和	
専門	選択必修	材料物理学	0021	学修単位	2			2							日原 岳彦	
一般	必修	センサ工学	0037	学修単位	2							2			西村 一寛	
一般	必修	技術英語Ⅱ	0039	学修単位	1							1			Lawson Michael	
一般	必修	国際関係論	0040	学修単位	2							2			松岡 信之, 中野 潤三	
一般	選択	経営学	0041	学修単位	2					2					田添 丈博, 瀧本 和彦	
一般	選択	言語表現学特論	0042	学修単位	2							2			石谷 春樹	
一般	選択	海外語学実習Ⅰ	0043	学修単位	1					集中講義					海外語学実習担当教員	
一般	選択	海外語学実習Ⅱ	0044	学修単位	2					集中講義					海外語学実習担当教員	
一般	選択	海外語学実習Ⅲ	0045	学修単位	3					集中講義					海外語学実習担当教員	
一般	選択	実践工業数学Ⅰ	0048	学修単位	1					1					堀江 太郎, 箕浦 弘人, 白井 達也, 打田 正樹, 柴垣 寛治	
一般	選択	実践工業数学Ⅱ	0049	学修単位	1					1					堀江 太郎, 山口 雅裕, 柴垣 寛治, 和田 憲幸	
一般	選択	生命工学	0050	学修単位	2							2			丹波 之宏, 山口 雅裕	
一般	必修	物性工学	0051	学修単位	2					2					和田 憲幸	
一般	選択	インターンシップⅠ	0055	学修単位	1					集中講義					山口 雅裕, 近藤 邦和, 青山 俊弘, 川口 雅司	
一般	選択	インターンシップⅡ	0056	学修単位	2					集中講義					山口 雅裕, 近藤 邦和, 青山 俊弘, 川口 雅司	

一般	選択	インターンシップⅢ	0057	学修単位	4	集中講義	山口 雅裕, 近藤 邦和, 青山 俊弘, 川口 雅司	
一般	選択	国際インターンシップⅠ	0058	学修単位	2	集中講義	山口 雅裕, 近藤 邦和, 川口 雅司	
一般	選択	国際インターンシップⅡ	0059	学修単位	4	集中講義	山口 雅裕, 近藤 邦和, 川口 雅司	
専門	コース選択必修	環境科学特論	0032	学修単位	2	2	甲斐 穂高	
専門	必修	総合イノベーション工学 輪講	0033	学修単位	2	2	山口 雅裕, 近藤 邦和	
専門	必修	特別研究Ⅱ	0034	学修単位	8	4 4	特別研究Ⅱ指導教員	
専門	コース必修	海洋環境学	0035	学修単位	2	2	山田 二久次	
専門	コース選択必修	生体機能工学	0036	学修単位	2	2	今田 一姫	
専門	選択	電気理論特論	0038	学修単位	2	2	西村 高志	
専門	選択	IoTシステム特論	0046	学修単位	2	2	青山 俊弘	
専門	選択	電子材料特論	0047	学修単位	2	2	伊藤 明, 西村 一寛	
専門	コース選択必修	有機材料工学	0052	学修単位	2	2	下古谷 博司	
専門	選択必修	環境調和材料	0053	学修単位	2	2	黒飛 紀美	
専門	選択	材料強度工学	0054	学修単位	2	2	黒田 大介	
専門	選択	特別講義	0060	学修単位	2	集中講義	山口 雅裕, 近藤 邦和	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	物理学特論	
科目基礎情報							
科目番号	0001			科目区分	一般 / 選択		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	自作テキスト						
担当教員	仲本 朝基						
到達目標							
量子力学と統計力学の基本概念を理解し、工学の基礎となる物性を考える上において、その構成要素である粒子の力学体系の本質的理解と、それらが物性とどのように結び付いているかについての本質的理解を得ることが出来る。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	量子力学に関する応用問題を解くことができる。			量子力学に関する基本問題を解くことができる。		量子力学に関する基本問題を解くことができない。	
評価項目2	古典統計力学に関する応用問題を解くことができる。			古典統計力学に関する基本問題を解くことができる。		古典統計力学に関する基本問題を解くことができない。	
評価項目3	量子統計力学に関する応用問題を解くことができる。			量子統計力学に関する基本問題を解くことができる。		量子統計力学に関する基本問題を解くことができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	現代工学の最先端領域において、物性の基となる電子・原子の特徴を理解するために量子力学を、そしてそれらを物性レベルにまで反映させるための手段として量子統計力学を活用することは必要不可欠である。この授業では、それらの学問の根本的かつ本質的な考え方・ものの見方について身に付けることを目指す。						
授業の進め方・方法	・すべての内容は学習・教育到達目標（B）＜基礎＞に相当する。 ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。						
注意点	<到達目標の評価方法と基準> 各週における到達目標の各習得度確認を小テスト、中間・定期試験によって行う。 ・1～6の重みは概ね均等である。評価結果が百分法で60点以上の場合に目標の達成とみなせるレベルの試験を課す。 <学業成績の評価方法および評価基準> 中間試験と定期試験の平均点を75％、小テストの平均点を25％の割合で総合評価したものを学業成績とする。 <単位修得要件> 学業成績で60点以上を取得すること。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲> 数学全般（確率・統計の基本的な考え方、線形代数、三角関数、微分積分）、古典力学、電磁気学、熱力学、波動学（すなわち、「物理」「応用物理Ⅰ・Ⅱ」「物理学特講」等の学習が基礎となっている） <自己学習> 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験・定期試験・小テストのための学習も含む）に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。 <備考> 古典力学と量子力学、量子力学と統計力学、統計力学と熱力学、などをまったく別の学問たちと考えず、深い関わりがあることを十分認識しながら学習すること。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☒ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	前期量子論		1. 光の粒子性、電子の波動性など、物質波について説明できる。		
		2週	シュレーディンガー方程式		2. シュレーディンガー方程式の成り立ちを説明できる。		
		3週	波動関数		3. 波動関数についての現代的解釈が説明できる。		
		4週	期待値、不確定性原理		4. 期待値について計算でき、不確定性原理について説明できる。		
		5週	トンネル効果		5. トンネル効果について説明できる。		
		6週	水素原子の量子力学的記述(1)		6. 水素原子に関して量子力学的記述を理解するための準備をする。		
		7週	水素原子の量子力学的記述(2)		7. 水素原子に関する量子力学的記述において、電子軌道がとびとびになることが説明できる。		
		8週	中間試験		8. これまでに学習した内容を説明できる。		
	4thQ	9週	統計力学の数学的準備		9. 場合の数や確率の計算、典型的な統計分布やStirlingの公式等の説明ができる。		
		10週	力学と確率		10. 先験的等確率の原理、エルゴード仮説について説明できる。		
		11週	小正準分布、ボルツマンの関係		11. ボルツマンの関係式を利用できる。		
		12週	古典統計：ボルツマン統計		12. ボルツマン統計を説明できる。		
		13週	正準分布、比熱のアインシュタイン模型		13. 比熱に関して、デュロン・プティの法則またはアインシュタイン模型を説明できる。		
		14週	パウリの排他原理、粒子の対称性、フェルミ統計		14. フェルミ・ディラック統計について説明できる。		
		15週	ボーズ統計、ボーズ・アインシュタイン凝縮		15. ボーズ・アインシュタイン統計について説明できる。		
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週

評価割合							
	試験	小テスト	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	75	25	0	0	0	0	100
配点	75	25	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	環境保全工学	
科目基礎情報							
科目番号		0002		科目区分		一般 / 必修	
授業形態		授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科		総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年		専1	
開設期		後期		週時間数		2	
教科書/教材		授業プリントを用いる 参考書：「新・公害防止の技術と法規 大気編」公害防止の技術と法規編集委員会編（産業公害防止協会）					
担当教員		甲斐 穂高					
到達目標							
地球規模および産業活動に関連した環境保全の知識や関連技術について理解し、これらを基にして様々な環境問題の現状を把握するとともに、これらの問題を解決する方法を説明できるようになる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		気候変動に関する現在の状況と今後の影響について各データを用いてを説明でき、将来に向けての国際的な対策を説明できる。		各データに基づいて気候変動に関する現在の状況と今後の影響を説明できる。		気候変動に関する現在の状況や今後の影響を説明できない。	
評価項目2		大気汚染に関する現在の状況と今後の影響について各データを用いてを説明でき、将来に向けての国際的な対策を説明できる。		各データに基づいて大気汚染に関する現在の状況と今後の影響を説明できる。		大気汚染に関する現在の状況や今後の影響を説明できない。	
評価項目3		地球環境問題に対する現状とそれに対する技術的な解決策について説明できる。		地球環境問題に対する現状とそれに対する技術的な解決策について、データを踏まえて説明できる。		地球環境問題に対する現状とそれに対する技術的な解決策について説明できない。	
評価項目4		廃棄物の種類と適正処理について説明できる。		廃棄物の種類と適正処理について図表を参考にしながら説明できる。		廃棄物の種類と適正処理について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		地球規模で起こっている環境問題の現状や自然への影響を学び、これらの技術的な対策について理解する。地球環境問題の発生メカニズムや対策などを物理、化学、生物の基礎知識を踏まえて理解し、問題解決のための工学的な手法を理解する。なお、各授業で関連する最新の内容を随時紹介する。					
授業の進め方・方法		すべての内容は学習・教育到達目標(B)＜専門＞とJABEE基準1(2)(d)(1)に対応する。授業は講義とグループ学習を併用した形式で行う場合がある。講義は集中して聴講し、グループ学習が行われる場合は与えられた課題を積極的に取り組むこと。グループ学習では、与えられた課題をとりまとめて、発表を行うポスターツアー形式を取り入れて行う。「授業計画」における各週の「到達目標」は、この授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。					
注意点		＜到達目標の評価方法と基準＞ この授業で習得する「知識・能力」において示されている『16』の到達目標について、理論的な考え方や原理等について理解したうえで説明ができるようになること。これらについて定期試験で確認を行う。各到達目標に関する重みづけは同じである。 ＜学業成績の評価方法および評価基準＞ 1. 学業成績は、中間試験と期末試験の得点の平均点を学業成績評価点とし、学業成績評価点が60点以上であれば単位認定とする。 2. 再試験は実施しない。定期試験を無断欠席した場合（試験開始時までに担任等への欠席の連絡がない場合）も同様である。 ＜単位修得要件＞ 学業成績評価点が60点以上であること。 ＜あらかじめ要求される基礎知識の範囲＞ 有機化学, 有機化学, 分析化学, 物理化学, 化学工学および物理学の基本的事項は理解していることが望ましい。 ＜レポート等＞ 開講期間中にレポートや課題を課す。					
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	授業の進め方 現在の地球環境について		1. 地球の過去の気象状況と現在の温暖化の現状を説明できる。		
		2週	地球温暖化（1）		2. 地球温暖化のメカニズムと影響を説明できる。		
		3週	地球温暖化（2）		3. IPCCの概要を説明できる。 4. 温暖化を抑制する技術について説明できる。		
		4週	地球温暖化（3）		5. 温暖化を抑制する政策やその背景を説明できる。		
		5週	地球温暖化（4）		6. 温暖化に関する世界の最新情報とその現状について説明できる。		
		6週	大気汚染（1）		7. 過去から現在にいたる大気汚染の状況について説明できる。		
		7週	大気汚染（2）		8. 酸性雨の原因物質と発生メカニズム（湿性沈着を含む）を説明できる。 9. 酸性雨（湿性沈着）の影響（概要）を説明できる。		
		8週	前期中間試験				

	4thQ	9週	前期中間試験を振り返って 大気汚染（３）	1 0．酸性雨（湿性沈着）の影響（詳細）を説明できる．
		10週	大気汚染（４）	1 1．大気汚染物質の経年変化と汚染物質の抑制技術を説明できる．
		11週	オゾン層の破壊（１）	1 2．オゾン層の現状について説明できる．
		12週	オゾン層の破壊（２）	1 3．オゾン層を破壊する化学物質について説明できる．
		13週	廃棄物処理（１）	1 4．廃棄物の概要と種類を説明できる．
		14週	廃棄物処理（２）	1 5．廃棄物の適正処理を説明できる．
		15週	廃棄物処理（３）	1 6．廃棄物の再資源化について説明できる．
		16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標				到達レベル	授業週
評価割合								
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計	
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100	
配点	100	0	0	0	0	0	100	

	テーマごとのレポート, ディスカッション	最終発表および最終レポート	合計
総合評価割合	50	50	100
配点	50	50	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	技術者倫理	
科目基礎情報							
科目番号	0011			科目区分	一般 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	教科書：「技術の営みの教養基礎 技術の知と倫理」比屋根 均著(理工図書) 参考書：「技術者倫理 日本の事例と考察 問題点と判断基準を探る」公益社団法人日本技術士会登録技術者倫理研究会監修 田岡直規・橋本義平・水野朝夫 編著						
担当教員	横山 春喜,春田 要一,打田 憲生,山口 正隆,鶴田 忠志,藤井 淳司						
到達目標							
技術者と社会の関係を理解しており、実例をもとに事例研究ができる専門知識を習得し、今後の科学技術の利用、研究開発活動に応用できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目 1		技術者に必要な倫理観を持って技術者の役割を果たすことができる。		技術者に必要な倫理観と技術者の役割について説明できる。		技術者に必要な倫理観と技術者の役割について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	この科目は、科学技術の利用、研究開発活動をはじめとする技術業務を、社会と組織の中で適切に行うために必要な倫理観等について講義形式で授業を行うものである。全15週のうち、第1週、第8週および第13週から第15週は企業で通信用の電子・光デバイスを研究開発していた者が担当し、他の週は各種業界で実務経験がある技術士が担当する。						
授業の進め方・方法	・すべての内容は、学習・教育目標(A)＜技術者倫理＞に対応する。 ・授業は講義形式で行う。講義中は集中して聴講する。 ・「授業計画」における各週の「達成目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。						
注意点	＜達成目標の評価方法と基準＞「知識・能力」1～3の確認を後期中間試験、学年末試験で行う。1～3に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。4については事例研究報告会およびレポートで確認する。 ＜学業成績の評価方法および評価基準＞中間・期末試験結果の平均値を60%、事例研究発表及びレポートの結果を40%として最終評価とする。再試験は行わない。 ＜単位修得要件＞与えられた課題レポートを全て提出し、学業成績で60点以上を取得すること。 ＜あらかじめ要求される基礎知識の範囲＞本教科では、倫理・社会および技術者倫理入門Ⅰ、Ⅱ、哲学Ⅰ、Ⅱの学習が基礎となる教科である。 ＜自己学習＞授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験のための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。受講にあたっては、教科書の該当箇所、講師の紹介した参考文献などで予習し、不明な点をまとめておくこと。 ＜備考＞この科目では、技術者としての専門知識を学ぶのではなく、なぜ技術者には高い水準の技術者倫理が要求されるのかを理解し、学んだ専門知識をそれに結びつけて日常的業務を行う意識・知恵を身につけることが重要である。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	技術士、技術士補の現状（授業概要、技術士とは、技術士試験等について）（担当Y）		1. 社会における技術者の役割を理解できる。		
		2週	ガイダンス（担当Ⅰ）		1. 社会における技術者の役割を理解できる。		
		3週	技術者倫理の目的（担当Ⅰ）		2. 技術者倫理の要素を理解できる。		
		4週	科学技術の正しさとその限界(担当I)		3. 技術者倫理に対する素養と感受性の向上を図ることができる。		
		5週	科学的知識と技術（担当I）		上記3に同じ。		
		6週	技術知の戦略（担当Y）		上記3に同じ。		
		7週	組織における技術知と情報（担当Y）		上記3に同じ。		
		8週	中間テスト		上記3に同じ。		
	4thQ	9週	技術の専門職という立場(担当U)		上記3に同じ。		
		10週	誠実な仕事（担当U）		上記3に同じ。		
		11週	義務と同意・説明責任、透明性の確保、安心、技術と法（担当H）		上記3に同じ。		
		12週	技術専門知の役割(担当H)		上記3に同じ。		
		13週	事例研究_1(チャレンジャー事故)(担当Y)		4. 実社会で発生した技術者倫理に反する事例を取り上げて、グループで討議し、プレゼンツールを用いて発表、質疑応答を行うとともに、結果を纏めてレポートできる。		
		14週	事例研究_2(事例選択とグループ討議）（担当Y）		上記4に同じ。		
		15週	事例研究_3(グループ発表とレポート）（担当Y）		上記4に同じ。		
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	60	40	0	0	0	0	100

配点	60	40	0	0	0	0	100
----	----	----	---	---	---	---	-----

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)	授業科目	技術英語 I
科目基礎情報					
科目番号	0012		科目区分	一般 / 必修	
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 1	
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専1	
開設期	前期		週時間数	1	
教科書/教材	1. Documents downloaded from Internet file storage. 2. Material as distributed in class.				
担当教員	Lawson Michael				
到達目標					
The objective of this course is to introduce students to techniques to help them create and give English-language oral presentations.					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1	母国以外の言語や文化を理解しようとする姿勢をもち、実際の場面や目的に応じて、基本的なコミュニケーション方略（繰り返しや相槌、ジェスチャー、アイコンタクトなどのボディランゲージ）を適切に用いながら、積極的にコミュニケーションを図り、その応用ができる。また、日常生活や身近な話題に関して、自分の意見や感想を応用的な表現を用いて英語で話すことができ、自分の意見や感想を整理し、応用的に100語以上のまとまりのある文章を英語で書くことができる。		母国以外の言語や文化を理解しようとする姿勢をもち、実際の場面や目的に応じて、基本的なコミュニケーション方略（繰り返しや相槌、ジェスチャー、アイコンタクトなどのボディランゲージ）を適切に用いながら、積極的にコミュニケーションを図ることができる。また、日常生活や身近な話題に関して、自分の意見や感想を基本的な表現を用いて英語で話すことができ、自分の意見や感想を整理し、100語程度のまとまりのある文章を英語で書くことができる。		母国以外の言語や文化を理解しようとする姿勢をもち、実際の場面や目的に応じて、基本的なコミュニケーション方略（繰り返しや相槌、ジェスチャー、アイコンタクトなどのボディランゲージ）を適切に用いながら、積極的にコミュニケーションを図ることができない。また、日常生活や身近な話題に関して、自分の意見や感想を基本的な表現を用いて英語で話せず、自分の意見や感想を整理し、100語程度のまとまりのある文章を英語で書くことができない。
評価項目2	自分の専門分野などの予備知識のある内容や関心のある事柄に関する報告や対話などを毎分120語以上の速度で聞いて、概要を把握し、情報を聴き取り、その応用ができる。関心のあるトピックや自分の専門分野での英語を使う場面（プレゼンテーション、ディスカッションやディベートなど）を想定して、学生自らが準備活動や情報収集を行い、母国以外の言語や文化を理解しようとする姿勢をもちながら、主体的な態度で教室内外での日常的な質問や応答など英語で円滑かつ応用的にコミュニケーションをとることができる。また、関心のあるトピックについて、200語以上の文章をパラグラフライティングなど論理的文章の構成に留意して応用的に書くことができる。		自分の専門分野などの予備知識のある内容や関心のある事柄に関する報告や対話などを毎分120語程度の速度で聞いて、概要を把握し、情報を聴き取ることができる。関心のあるトピックや自分の専門分野での英語を使う場面（プレゼンテーション、ディスカッションやディベートなど）を想定して、学生自らが準備活動や情報収集を行い、母国以外の言語や文化を理解しようとする姿勢をもちながら、主体的な態度で教室内外での日常的な質問や応答など英語で円滑なコミュニケーションをとることができる。また、関心のあるトピックについて、200語程度の文章をパラグラフライティングなど論理的文章の構成に留意して書くことができる。		自分の専門分野などの予備知識のある内容や関心のある事柄に関する報告や対話などを毎分120語程度の速度で聞いて、概要を把握し、情報を聴き取ることができない。関心のあるトピックや自分の専門分野での英語を使う場面（プレゼンテーション、ディスカッションやディベートなど）を想定して、学生自らが準備活動や情報収集を行い、母国以外の言語や文化を理解しようとする姿勢をもちながら、主体的な態度で教室内外での日常的な質問や応答など英語で円滑なコミュニケーションをとることができない。また、関心のあるトピックについて、200語程度の文章をパラグラフライティングなど論理的文章の構成に留意して書くことができない。
評価項目3	それぞれの国の文化や歴史に敬意を払い、その違いを受け入れる寛容さが必要であることを認識しながら、その国の生活習慣や宗教的信条、価値観などの基本的な事象を自分たちの文化と関連付けて説明、解釈の適用ができる。		それぞれの国の文化や歴史に敬意を払い、その違いを受け入れる寛容さが必要であることを認識しながら、その国の生活習慣や宗教的信条、価値観などの基本的な事象を自分たちの文化と関連付けて説明し、解釈できる。		それぞれの国の文化や歴史に敬意を払い、その違いを受け入れる寛容さが必要であることを認識しながら、その国の生活習慣や宗教的信条、価値観などの基本的な事象を自分たちの文化と関連付けて説明も、解釈もできない。
学科の到達目標項目との関係					
教育方法等					
概要	The objectives of this course are to 1) have students select a topic for an English oral presentation, 2) to teach students how to create an outline to crystallize their thoughts into a cogent discussion of their topic that will then be used in the development of a PowerPoint presentation; 3) to teach students to actually give a presentation in English; and 4) to select three students to participate in the 12thAnnual English Presentation Contest for Students of Colleges of Technology				
授業の進め方・方法	The following content conforms to the learning and educational goals:(C) <English> [JABEE Standard 1(1)f].				

注意点	<到達目標の評価方法と基準> Students' English oral presentation ability will be evaluated through one "Main" English oral presentation to be given on the 15th week of class. Students will have attained the goal of this course provided that they have earned 60% of the total points possible which includes the 1 "Main" presentation. <学業成績の評価方法および評価基準> Students are required to give 1 "Main Presentation". The total time necessary for students to acquire an understanding of the course is 45 hours, including classroom time and study/presentation time outside of the classroom. Failure to meet any of these requirements will reduce a group's final course score by 10% for each infraction. <単位修得要件> Students must obtain at least 60% of the total possible points in order to receive 1 credit. <あらかじめ要求される基礎知識の範囲> A good command of basic English syntax; a practical level of reading and listening comprehension, and some ability to converse in English as achieved through their first five years at Suzuka Kosen. <レポートなど> Students will be given weekly assignments, such as, topic selection, weekly outline and PowerPoint updates. Failure to meet the deadlines for these assignments will result in a 10% reduction of the final grade—for each infraction. Students are required to obtain an email account which can send and receive Word and PowerPoint documents. During the last class session prior to the presentation contest, students must meet four main assignment deadlines: 1) Final PowerPoint files on USB must be downloaded to Lawson's computer, 2) Final scripts with presentation titles on the first page on USB must be downloaded to Lawson's computer, 3) Speaking order sheets using student numbers (not names) on USB must be downloaded to Lawson's computer, and 4) actual hardcopy student number "name" tags must be given to Lawson. <備考> You may contact me at: lawson@genl.suzuka-ct.ac.jp.

授業の属性・履修上の区分

☐ アクティブラーニング	☐ ICT 利用	☐ 遠隔授業対応	☐ 実務経験のある教員による授業
-------------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---

授業計画

		週	授業内容	週ごとの到達目標
前期	1stQ	1週	Introduce class, Select Groups, Discuss 5-step presentation process, Discuss topic, Discuss purpose of outline.	Students will learn about Discuss 5-step presentation process, Discuss topic, Discuss purpose of outline.
		2週	Discuss Outlines draft 1	1. To develop English oral presentation ability by studying effective presentation techniques such as eye-contact, gestures etc., and by conducting weekly in-class presentations. 2. To learn practical and useful words, phrases and expressions for oral presentations. 3. Students will learn how to prepare for oral presentation and shape their idea into logical and persuasive presentation. 4. Students will improve their ability to give an oral presentation in English.
		3週	Discuss Outlines draft 2	1~4 listed above.
		4週	Discuss Outlines draft 3	1~4 listed above.
		5週	Discuss PowerPoint draft 1	1~4 listed above.
		6週	Discuss PowerPoint draft 2	1~4 listed above.
		7週	Discuss PowerPoint draft 3	1~4 listed above.
		8週	Practice "Main Oral Presentation"	1~4 listed above.
	2ndQ	9週	Practice "Main Oral Presentation"	1~4 listed above.
		10週	Practice "Main Oral Presentation"	1~4 listed above.
		11週	Practice "Main Oral Presentation"	1~4 listed above.
		12週	Practice "Main Oral Presentation"	1~4 listed above.
		13週	Practice "Main Oral Presentation"	1~4 listed above.
		14週	Practice "Main Oral Presentation"	1~4 listed above.
		15週	ORAL PRESENTATIONS IN THE AUDIO/VISUAL ROOM	1~4 listed above.
		16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
----	----	------	-----------	-------	-----

評価割合

	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	90	10	0	0	0	0	100
配点	90	10	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	応用情報工学
科目基礎情報						
科目番号	0013		科目区分	一般 / 必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専1		
開設期	前期		週時間数	2		
教科書/教材	教科書：「東京大学のデータサイエンティスト育成講座」塚本邦尊, 他（マイナビ出版） 参考書：「データベースービッグデータ時代の基礎ー」三石大, 他（共立出版）					
担当教員	田添 丈博					
到達目標						
データサイエンスの概要を理解し、Pythonを用いた簡単なデータ分析プログラムを作成でき、さらに、さまざまなデータの中から色々な問題を解決していくことができる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1						
評価項目2						
評価項目3						
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	データサイエンスに必須なスキルを幅広く扱う。Pythonというプログラミング言語を使って、基本的なプログラムの書き方、さまざまなPythonのライブラリの使い方、機械学習の使い方についても学ぶ。					
授業の進め方・方法	・学習内容は、すべて、学習・教育到達目標の(B)の<専門>に対応する。 ・授業は、質問を受け付けながら、理解の度合いを確認できる演習を含め、講義形式で進める。 ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。					
注意点	〔到達目標の評価方法と基準〕 「到達目標」の習得の度合を試験、課題により評価する。評価における「知識・能力」の重みの目安は全ての項目でほぼ同等である。試験問題と課題のレベルは、100点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。 〔学業成績の評価方法および評価基準〕 試験の評価を60%、課題の評価を40%、として評価する。ただし、試験の得点が60点に満たない場合は、補講の受講やレポート提出等の後、再試験により再度評価し、合格点の場合は先の試験の得点を60点と見なす。 〔単位修得要件〕 学業成績で60点以上を取得すること。 〔注意事項〕 自己学習を前提とした規定の単位制に基づき授業を進め、課題提出を求める。課題を解くには特別なコンピュータシステムを必要としないので、日頃の自学自習に力を入れること。プログラミングを得意としない学生にも理解しやすいように講義と実習を行うので、コンピュータ利用に対して無用なコンプレックスを持つことが無いようお願いしたい。 〔あらかじめ要求される基礎知識の範囲〕 基本的なコンピュータ利用技術の経験を有することが望ましい。電子情報工学科からの進学者については、情報理論、数値解析は本教科のより深い理解のため修得が望ましい。					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	Pythonの基礎	1. Jupyter Notebookを使ってPythonの基礎的な実装ができるようになる。		
		2週	科学計算，データ加工，グラフ描画ライブラリの使い方の基礎	2. Numpy, Scipy, Pandas, Matplotlibのライブラリを読み込み，それらの基本的な役割を知り，使い方がわかる。		
		3週	科学計算，データ加工，グラフ描画ライブラリの使い方の基礎 続き	上記 2		
		4週	記述統計と単回帰分析	3. CSVファイルのデータを読み込み，基礎的な統計量の算出と可視化，単回帰分析ができる。		
		5週	確率と統計の基礎	4. 確率と統計の基礎的な理解と計算ができる。		
		6週	Pythonによる科学計算（NumpyとScipy）	5. NumpyやScipyを使ったデータの生成や科学的計算方法の知識を深める。		
		7週	Pandasを使ったデータ加工処理	6. Pandasを使ったデータの抽出，操作，処理方法の知識を深める。		
		8週	中間レポート	これまでに学習した内容を説明できる。		
	2ndQ	9週	Matplotlibを使ったデータ可視化	7. Matplotlibを使って，さまざまなデータを可視化することができる。		
		10週	機械学習の基礎（教師あり学習）	8. 機械学習の体系と概要を学び，教師あり学習のモデルを使ってモデル構築や評価を正しく実行できるようになる。		
		11週	機械学習の基礎（教師あり学習） 続き	上記 8		
		12週	機械学習の基礎（教師なし学習）	9. 教師なし学習のモデルを使ってモデル構築や評価を正しく実行できるようになる。		
		13週	機械学習の基礎（教師なし学習） 続き	上記 9		
		14週	モデルの検証方法とチューニング方法	10. モデル構築時の注意点や評価方法を学び，評価指標を計算することができる。		
		15週	総合演習	11. 問題解決に必要な手法を探し当て，適切に使用することができる。		

		16週		
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標				
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル 授業週
評価割合				
	試験	課題	相互評価	態度 発表 その他 合計
総合評価割合	60	40	0	0 0 0 100
配点	60	40	0	0 0 0 100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	代数学特論	
科目基礎情報							
科目番号	0014		科目区分		一般 / 必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年		専1		
開設期	前期		週時間数		2		
教科書/教材	教科書：担当教員作の配布プリント、参考書：「演習と応用 線形代数」（寺田文行・木村宣昭著 サイエンス社）						
担当教員	堀江 太郎						
到達目標							
線形代数の基本的な概念をしっかりとした形で理解し、それに基づいて具体的な問題を解くことができ、大学院へ進学する学生が後に必要となる知識を体系的に身につける。時間が許せば、群や体などの抽象代数学にも触れ、代数学における最初の金字塔「ガロア理論」を目標にしたい。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		線形空間および線形写像の概念と考え方を理解し、発展的な問題で適切に計算・応用することができる。		線形空間および線形写像の概念と考え方を理解し、基本的な問題で適切に計算・応用することができる。		線形空間および線形写像の概念と考え方を理解しておらず、基本的な問題でも適切に計算することができない。	
評価項目2		固有値と固有ベクトルの性質・行列の対角化との関連を理解し、発展的な問題で適切に計算・応用することができる。		固有値と固有ベクトルの性質・行列の対角化との関連を理解し、基礎的な問題で適切に計算することができる。		固有値と固有ベクトルの性質・行列の対角化との関連を理解しておらず、基礎的な問題で適切に計算することができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		線形代数の知識の再確認と補充を行った上で、線形空間や線形写像などの抽象化された概念を、行列を用いて表現し取り扱う手法について学ぶ。講義内容の選定においては大学院の入学試験対策も意識したい。時間が許せば、群や体などの抽象代数学にも触れ、代数学における最初の金字塔「ガロア理論」を目標にしたい。					
授業の進め方・方法		この授業の内容は全て学習・教育到達目標(B)〈基礎〉及びJABEE基準1.2(c)に対応する。「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。					
注意点		＜到達目標の評価方法と基準＞ 下記授業計画の「到達目標」の習得の度合を前期末試験及び課題に課す課題で評価する。 ＜学業成績の評価方法および評価基準＞ 中間試験、前期末試験を70％、課題の評価を30％として評価する。再試験は実施しない。 ＜単位修得要件＞ 学業成績で60点以上を取得すること。 ＜あらかじめ要求される基礎知識の範囲＞ 本教科は微分積分ⅠとⅡ、線形代数ⅠとⅡの学習が基礎となる教科である。 ＜自己学習＞ 授業で保証する学習時間と、予習・復習（定期試験のための学習を含む）、個人に課題に必要な標準的な学習時間の総計が90時間に相当する学習内容である。					
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	行列の性質、1次独立と1次従属		1. 行列の基本的性質やランク、ベクトルの1次独立性を理解している		
		2週	線形（ベクトル）空間、基底と次元		2. 線形空間について理解し、その基底や次元を求めることができる		
		3週	線形写像、Image と Kernel		3. 線形写像を理解し、像(Image)と核(Kernel)を求めることができる		
		4週	線形写像の表現行列		4. 線形写像の表現行列を求めることができる		
		5週	表現行列と基底変換		5. 基底が変わった場合に表現行列がどう変化するかを理解している		
		6週	正方行列の固有空間		6. 固有空間を求めることができる		
		7週	対角化可能性		7. 行列の対角化可能性を判定できる		
		8週	正規行列、直交行列と対称行列、2次曲線と2次曲面		8. 対称行列を直交行列を用いて対角化できる。2次曲線を標準化できる。		
	2ndQ	9週	中間試験				
		10週	正方行列の一般固有空間		10. 一般固有空間について理解し、求めることができる		
		11週	ジョルダン標準形		11. 与えられた行列のジョルダン標準形を求めることができる		
		12週	代数方程式と群の発見		12. 群の定義を理解し、具体的な例で群の計算ができる		
		13週	円分方程式、規約剰余類		13. 3次・4次の方程式、円分方程式を解くことができる		
		14週	群の（体への）作用		14. 体の定義とその例、群の体への作用が理解できる		
		15週	ガロア理論と様々な実例、総合的演習		上記1～14		
		16週	前期末試験				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							

	定期試験	課題や小テスト		合計
総合評価割合	70	30	0	100
配点	70	30	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	数理解析学	
科目基礎情報							
科目番号	0015			科目区分	一般 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	教科書：なし（毎回資料を配布する）参考書：「複素関数概説」今吉洋一著（サイエンス社）、「複素解析」L.V.アールフォルス著（現代数学社）						
担当教員	菊池 翔太						
到達目標							
＜この授業の到達目標＞ 複素数および複素関数の基本事項について理解すること。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目 1	学科で学んだ微分積分の知識を自在に応用できる。			学科で学んだ微分積分の知識を応用できる。		学科で学んだ微分積分の知識を応用できない。	
評価項目 2	数理解析学の理論的基礎をよく理解している。			数理解析学の理論的基礎を理解している。		数理解析学の理論的基礎を理解していない。	
評価項目 3	数理解析学の知識を応用して、新しい問題に取り組むことができる。			数理解析学の知識を応用できる。		数理解析学の知識を応用できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	＜授業のねらい＞ 複素関数論は数ある数学の理論の中でも、最も美しい結果を備え、さまざまな分野への応用も豊富な理論の一つである。 ・学科で学んだ微分積分の内容を踏まえて、複素関数論の様々な美しい結果を学ぶ。						
授業の進め方・方法	＜授業の内容＞ この授業の内容は全て学習・教育到達目標(B)＜基礎＞及びJABEE基準 1 (2)(c)に対応する。						
注意点	＜学業成績の評価方法および評価基準＞ 学年末試験の点数を70%、課題の評価を30%として評価する。再試験は実施しない。 ＜単位修得要件＞ 学業成績で60点以上を取得すること。						
授業の属性・履修上の区分							
☒ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	複素数と複素平面1		1. 複素数と複素平面について理解する。		
		2週	複素数と複素平面2		2. オイラーの公式について理解する。		
		3週	複素関数1		3. 初等的な複素関数について理解する。		
		4週	複素関数2		4. 超越的初等関数について理解する。		
		5週	複素関数3		上記4.		
		6週	複素微分1		5. 正則関数について理解する。		
		7週	複素微分2		6. 正則関数とコーシー・リーマン方程式の関係について理解する。		
		8週	複素積分1		7. 複素積分について理解する。		
	4thQ	9週	複素積分2		8. コーシーの積分定理について理解する。		
		10週	正則関数1		9. 正則関数の諸性質について理解する。		
		11週	正則関数2		上記9.		
		12週	テイラー展開		10.テイラー展開について理解する。		
		13週	ローラン展開と有理型関数		11. ローラン展開と有理型関数について理解する。		
		14週	留数定理1		12. 留数定理について理解する。		
		15週	留数定理2		上記12.		
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	70	30	0	0	0	0	100
配点	70	30	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	実践工業数学 I	
科目基礎情報							
科目番号	0016		科目区分		一般 / 選択		
授業形態	授業		単位の種別と単位数		学修単位: 1		
開設学科	総合イノベーション工学専攻 (環境・資源コース)		対象学年		専1		
開設期	前期		週時間数		1		
教科書/教材	(教科書) : 実践工業数学 第3版 (受講者に配布) , eラーニング教材 (参考書) : 特になし						
担当教員	箕浦 弘人,白井 達也,打田 正樹,柴垣 寛治						
到達目標							
ベクトル, 行列, 微分方程式, 確率, 関数, 積分が, 機械工学, 電気・電子工学, 情報工学, 通信工学的な観点から理解でき, それらを使うことができる							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		ロボット工学における数学について理解し, 実践的な問題に応用できる.		ロボット工学における数学について理解して基礎的な問題を解ける.		ロボット工学における数学について理解していない.	
評価項目2		気体論における数学について理解し, 実践的な問題に応用できる.		気体論における数学について理解して基礎的な問題を解ける.		気体論における数学について理解していない.	
評価項目3		三次元位置計測における数学について理解し, 実践的な問題に応用できる.		三次元位置計測における数学について理解して基礎的な問題を解ける.		三次元位置計測における数学について理解していない.	
評価項目4		応力解析における数学について理解し, 実践的な問題に応用できる.		応力解析における数学について理解して基礎的な問題を解ける.		応力解析における数学について理解していない.	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		eラーニングに係る遠隔教育により, 工学の各専門に用いられる数学を応用面から理解しながら学ぶ.					
授業の進め方・方法		・すべての内容は, 学習・教育到達目標(B)<基礎><専門>に, JABEE基準1(2)(c), (d)に対応する. ・授業はオンラインのeラーニング教材を用いて各人が行う. 講義は計画的かつ集中して聴講する. ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする.					
注意点		<到達目標の評価方法と基準>「到達目標」1～3の習得の度合をレポート及びコンテンツへのアクセス状況により評価する. 各到達目標に関する重みの目安は, レポート評価に関しては各項目すべてにわたって出される中間課題と, 期末に出される特別課題に対して均等で, 全問正解を80%とする. レポート課題のレベルは百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する. またアクセス状況の評価は最大20%とする. <学業成績の評価方法および評価基準>各授業項目について中間及び期末の課題を全て正しく解答した提出レポート(80%)及びアクセス状況(20%)を基準として, 学業成績を総合的に評価する. 評価基準は, 次のとおり. 優 (100～80点), 良 (79～65点), 可 (64～60点), 不可 (59点以下). <単位修得要件>学業成績で60点以上を取得すること. <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>各学科の学科卒業程度の習得. <自己学習>授業で保証する学習時間と, 予習・復習及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が, 45時間に相当する学習内容である. <備考>この科目は「単位互換を伴う実践型講義配信事業に係る単位互換協定」における単位互換科目として実施する. 自己学習を前提とした規定の単位制に基づき授業を進めるので, 日頃の勉強に力を入れること.					
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☒ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	Ⅰ. ロボット工学編: ベクトルと行列 主担当: 鈴鹿高専 (機械工学科) 白井達也 数学部分: 群馬高専 碓氷久, 元鈴鹿高専 安富真一 (1) 多関節ロボットの順運動学: 座標変換, 位置と姿勢, 作業座標変換と関節角度空間, 水平多関節ロボットの変換行列による表現		1. 講義のポイントを理解し, レポートに要点がわかりやすくまとめることができる. 2. 疑問点を明確にし, レポートの中で, 考察, 資料調査がなされている. また, 必要に応じてメール等により質疑応答ができる. 3. レポートにおいて, 講義で紹介された内容, 関連事項, 応用について, 理解している.		
		2週	(2)多関節ロボットの逆運動学 一般化逆行列 (疑似変換逆行列), 軌道計画		上記1から3		
		3週	Ⅱ. 電気・電子工学編: 微分方程式, ベクトル, 確率, 関数 主担当: 鈴鹿高専 (電気電子工学科) 柴垣寛治 数学部分: 岐阜高専 岡田章三, 鈴鹿高専 堀江太郎 (1) 放電現象の物理: 放電プラズマの応用, 核融合プラズマ		上記1から3		
		4週	(2) 気体論: 気体の電氣的性質, 気体放電とプラズマ, 放電の開始と持続, パッシェンの法則		上記1から3		
		5週	Ⅲ. 情報工学編 (ベクトルと行列) 主担当: 鈴鹿高専 (電子情報工学科) 箕浦弘人 数学部分: 元鈴鹿高専 安富真一 (1) 三次元グラフィックス: 三次元空間でのアフィン変換と同時座標系, 透視投影と透視変換行列, 任意の平面への投影, 座標変換の効率化		上記1から3		
		6週	(2)三次元位置計測: 三次元座標の算出, 最小二乗法, 三次元位置計測と連立方程式の幾何学的解釈, 多視点による精度の向上, 変換行列の決定		上記1から3		

		7週	IV. 制御工学 主担当：鈴鹿高専（機械工学科）打田正樹 数学部分：鈴鹿高専 堀江太郎 (1) 有限要素解析に使用する要素：一次，二次三角形要素，一次，二次四辺形要素	上記 1 から 3
		8週	(2)応力解析における計算モデル：仮想仕事の原理，三角形要素の剛性マトリックス	上記 1 から 3
	2ndQ	9週		
		10週		
		11週		
		12週		
		13週		
		14週		
		15週		
		16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標				到達レベル	授業週
評価割合								
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計	
総合評価割合	0	80	0	0	0	20	100	
配点	0	80	0	0	0	20	100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	実践工業数学Ⅱ
科目基礎情報						
科目番号	0017		科目区分	一般 / 選択		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 1		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専1		
開設期	前期		週時間数	1		
教科書/教材	実践工業数学 第3版					
担当教員	兼松 秀行,山口 雅裕,和田 憲幸					
到達目標						
微分方程式, 確率, 関数, 統計, 微分, 積分, 三角関数が, 生物工学, 物理化学, 材料工学的な観点から理解でき, それらを使うことができる.						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	微分方程式, 確率, 関数, 統計, 微分, 積分, 三角関数を用いて, 生物工学, 物理化学および材料工学に関する応用的な問題を解くことができ, 応用できる.		微分方程式, 確率, 関数, 統計, 微分, 積分, 三角関数を用いて, 生物工学, 物理化学および材料工学に関する基礎的な問題を解くことができる.		微分方程式, 確率, 関数, 統計, 微分, 積分, 三角関数を用いて, 生物工学, 物理化学および材料工学に関する基礎的な問題も解くことができない.	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	実践工業数学Ⅱは, 確率, 統計, 微分, 積分の数学的知識を使い, 生物工学, 物理化学, 材料工学の専門科目への応用を, e-ラーニングによる遠隔教育によって学ぶ.					
授業の進め方・方法	・すべての内容は, 学習・教育到達目標(B)<基礎><専門>に, JABEE基準1.2(c), (d)に対応する. ・授業は, e-ラーニングによる遠隔教育によって行われ, 内容理解を各章Ⅴ～Ⅶのレポートの提出と結果によってを確認される. ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする.					
注意点	<到達目標の評価方法と基準>上記の「知識・能力」1～3の習得の度合をレポートおよびコンテンツへのアクセス状況により評価する. 「知識・能力」1～3の重みは均等で, 課題と期末に出される特別課題を80%とし, レポート課題のレベルは, 百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する. またアクセス状況の評価を最大20%とする. <学業成績の評価方法および評価基準>各授業項目について中間および期末の課題を全て正しく解答した提出レポート(80%)およびアクセス状況(20%)を基準として, 学業成績を総合的に評価する. なお, 優が100～80点, 良が79～65点, 可が64～60点, 不可が59点以下である. <単位修得要件>学業成績で60点以上を取得すること. <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>各学科の学科卒業程度の知識と能力を必要とする. また, 本教科は物理化学, 量子力学, 金属工学等の拡散の知識があればより理解が深まる. <自己学習>授業で保証する学習時間と, 予習・復習及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が, 45時間に相当する学習内容である. <備考>この科目は「単位互換を伴う実践型講義配信事業に係る単位互換協定」における単位互換科目として実施する. 自己学習を前提とした規定の単位制に基づき授業を進めるので, 日頃の勉強に力を入れること.					
授業の属性・履修上の区分						
☒ アクティブラーニング		☒ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	Ⅴ 生物工学編－確率・統計 (1) 生物統計1 パラメトリックな検定 検定の考え方, 検定の誤りと危険率, データの対応		1. 検定の考え方, 検定の誤りと危険率, データの対応, t検定, Welchの検定, Z検定を理解できる.	
		2週	(1) 生物統計1 パラメトリックな検定 t検定, Welchの検定, Z検定		上記1	
		3週	(2) 生物統計2 ノンパラメトリックな検定 U検定(Man-Whitney検定), χ^2 検定		2. U検定(Man-Whitney検定), χ^2 検定, 生物学的有意性と統計学的有意性の違い, 公式の選定を理解できる.	
		4週	(2) 生物統計2 ノンパラメトリックな検定 生物学的有意性と統計学的有意性の違い		上記2	
		5週	(2) 生物統計2 ノンパラメトリックな検定 公式の選定		上記2	
		6週	Ⅵ 物理化学編－微分・積分, 微分方程式, 三角関数 (1) 熱力学の基礎方程式とその応用 熱力学第1法則, 熱力学第2法則, 物質の熱容量, マックスウエルの関係式		Ⅵ 物理化学編－微分・積分, 微分方程式, 三角関数 (1) 熱力学の基礎方程式とその応用 熱力学第1法則, 熱力学第2法則, 物質の熱容量, マックスウエルの関係式	
		7週	エントロピーの温度依存性, 化学ポテンシャル, 反応と平衡常数		上記3	
		8週	(2) シュレーディンガー方程式とその解(並進運動(1次元, 3次元)) シュレーディンガー方程式, 自由電子のシュレーディンガー方程式の解法		4. 自由電子および井戸型ポテンシャル内, 有限平面内, 箱の中の並進運動, 回転運動および調和振動のシュレーディンガー方程式の解法, 規格化に使う数学を理解できる.	
	2ndQ	9週	井戸型ポテンシャル内の並進運動のシュレーディンガー方程式の解法と波動関数の規格化		上記4	
		10週	(3) シュレーディンガー方程式とその解(調和振動, 回転運動) 調和振動, 2次元回転運動(古典論)		上記4	
		11週	2次元回転運動(量子論), 3次元回転運動(量子論)		上記4	

		12週	VII 材料工学編－微分方程式と関数 (1) フィックの第一法則 金属中の拡散現象	5. 金属中の拡散現象，偏微分とフィックの第1法則の解法に使う数学が理解できる.
		13週	フィックの第1法則の解法	上記5
		14週	(2)フィックの第二法則 フィックの第2法則と定常状態での解法	6. フィックの第2法則と定常状態での解法，フィックの第2法則と非定常状態での解法，拡散距離が比較的短い場合の解法，有限な長さを持つ棒についての解法（変数分離）に使う数学を理解できる.
		15週	フィックの第2法則と非定常状態での解法，拡散距離	上記6
		16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
評価割合					
		課題	受講状況	合計	
総合評価割合		80	20	100	
配点		80	20	100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	信頼性工学	
科目基礎情報							
科目番号	0018			科目区分	一般 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	教科書：「入門 信頼性」田中 健次（日科技連出版社）参考書：「情報システム化時代の信頼性工学テキスト」栗原 謙三（日本理工出版会）						
担当教員	民秋 実						
到達目標							
信頼性工学に関する基礎理論を理解し、種々の条件の下で信頼性特性値を求めることができ、信頼性設計に応用することができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	信頼性工学に関する基礎理論を応用することができる。			信頼性工学に関する基礎理論を理解している。		信頼性工学に関する基礎理論を理解していない。	
評価項目2	応用的な信頼性特性値を求めることができる。			基本的な信頼性特性値を求めることができる。		信頼性特性値を求めることができない。	
評価項目3	信頼性設計に応用することができる。			信頼性設計に使うことができる。		信頼性設計に使うことができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	信頼性工学は、製品の信頼性を高めるための技術を整理して体系化したものである。この講義では、信頼性工学の基礎として、信頼性特性値の求め方・利用方法そして信頼性設計への応用について学習する。						
授業の進め方・方法	・すべての授業内容は、学習・教育到達目標(B)<専門>に対応する。 ・授業は講義・演習形式で行う。講義中は集中して聴講する。 ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。						
注意点	<到達目標の評価方法と基準> 1～13の「到達目標」を網羅した問題を中間試験、定期試験で出題し、目標の達成度を評価する。達成度評価における1～13に関する重みは同じである。試験問題のレベルは、合計点の60%以上の得点で、目標の達成を確認できるように設定する。 <学業成績の評価方法および評価基準>前期中間試験と前期末試験の平均点で評価する。ただし中間試験において60点に達していない学生については、それを補うための補講に参加し、再試験により中間試験の成績を上回った場合には、60点を上限として中間試験の成績を再試験の成績で置き換えて評価する。期末試験については再試験を行わない。 <単位修得要件>全ての課題を提出し、学業成績で60点以上を取得すること。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>信頼性工学は確率論を主な道具として信頼性を定量的に取り扱うものである。従って、本教科は応用数学Ⅲの学習が基礎となる教科であり、統計数理の基礎的事項について理解している必要がある。 <自己学習>授業で保証する学習時間のほか、予習・復習（中間試験、定期試験のための学習も含む）に要する学習時間が必要となる。 <備考>自己学習を前提として授業を進め、自己学習の成果を評価するために課題提出を求めるので、関数電卓を用意し、日頃の自己学習に励むこと。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☒ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	信頼性工学の基礎（歴史、用語）		1. 信頼性工学の用語について説明できる		
		2週	品質保証、製造物責任と信頼性		2. 品質保証、製造物責任について説明できる		
		3週	信頼性特性値：（故障率、MTTF、MTBF）		3. 信頼性特性値の物理的意味を説明でき、それらの値を計算することができる。		
		4週	保全性：（MTTR、PM、アベイラビリティ）		4. 保全に関する信頼性特性値の物理的意味を説明でき、それらの値を計算することができる。		
		5週	直列系、冗長系の信頼度		5. 直列系、冗長系の信頼度について計算できる。		
		6週	一般的な系の信頼度		6. 一般的な系の信頼度について計算できる。		
		7週	ワイブル分布と統計的手法（物理的背景、理論）		7. ワイブル分布確率紙を使って信頼性特性値を求めることができる。		
		8週	ワイブル分布と統計的手法（演習）		上記7.		
	2ndQ	9週	指数分布と信頼性特性値（物理的背景、理論）		8. 指数分布の場合の信頼性特性値を計算できる。		
		10週	信頼度の推定方法（点推定と区間推定）		9. 信頼度の点推定と区間推定を計算できる。		
		11週	二項分布、ポアソン分布		10. 二項分布、ポアソン分布の場合の信頼性特性値を計算できる。		
		12週	FMEA		11. 身近な事例について、FMEA解析が行える。		
		13週	FTA		12. 身近な事例について、FTA解析が行える。		
		14週	信頼性設計・信頼性試験・デザインレビュー		13. 信頼性設計について説明できる。		
		15週	前期範囲のまとめ・解説		これまでに学習した内容を説明し、諸量を求めることができる。		
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計

総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100
配点	100	0	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)	授業科目	英語表現論
科目基礎情報					
科目番号	0028		科目区分	一般 / 選択	
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専1	
開設期	前期		週時間数	2	
教科書/教材	Frankenstein by Mary Shelley, Penguin Readers				
担当教員	古野 百合				
到達目標					
英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳで得た英語の知識技能を活用し、より高度な英語の総合力を養うことを目指す。具体的には、読解力を向上させ、文法事項・語彙・慣用表現などの知識やリスニング力を強化する。また、理解した内容を英語で要約し発表する力を養うとともに、登場人物の心理や物語のテーマについて理解し、英文学作品を通して海外の文化や社会について理解を深める。					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1	自分の専門分野などの予備知識のある内容や関心のある事柄に関する報告や対話などを毎分120語程度の速度で聞いて、概要を把握し、情報を聞き取り、その内容の把握を他に適用することができる。		母国以外の言語や文化を理解しようとする姿勢をもち、実際の場面や目的に応じて、基本的なコミュニケーション方略（繰り返しや相槌、ジェスチャー、アイコンタクトなどのボディランゲージ）を適切に用いながら、積極的にコミュニケーションを図ることができる。また、日常生活や身近な話題に関して、自分の意見や感想を基本的な表現を用いて英語で話すができ、自分の意見や感想を整理し、100語程度のまとまりのある文章を英語で書くことができる。		母国以外の言語や文化を理解しようとする姿勢をもち、実際の場面や目的に応じて、基本的なコミュニケーション方略（繰り返しや相槌、ジェスチャー、アイコンタクトなどのボディランゲージ）を適切に用いながら、積極的にコミュニケーションを図ることができない。また、日常生活や身近な話題に関して、自分の意見や感想を基本的な表現を用いて英語で話せず、自分の意見や感想を整理し、100語程度のまとまりのある文章を英語で書くことができない。
評価項目2	関心のあるトピックや自分の専門分野に関する論文やマニュアルなどの概要を把握し、必要な情報を読み取り、その内容の把握を他に適用することができる。		自分の専門分野などの予備知識のある内容や関心のある事柄に関する報告や対話などを毎分120語程度の速度で聞いて、概要を把握し、情報を聴き取ることができる。関心のあるトピックや自分の専門分野での英語を使う場面（プレゼンテーション、ディスカッションやディベートなど）を想定して、学生自らが準備活動や情報収集を行い、母国以外の言語や文化を理解しようとする姿勢をもちながら、主体的な態度で教室内外での日常的な質問や応答など英語で円滑なコミュニケーションをとることができる。また、関心のあるトピックについて、200語程度の文章をパラグラフライティングなど論理的文章の構成に留意して書くことができる。		自分の専門分野などの予備知識のある内容や関心のある事柄に関する報告や対話などを毎分120語程度の速度で聞いて、概要を把握し、情報を聴き取ることができない。関心のあるトピックや自分の専門分野での英語を使う場面（プレゼンテーション、ディスカッションやディベートなど）を想定して、学生自らが準備活動や情報収集を行い、母国以外の言語や文化を理解しようとする姿勢をもちながら、主体的な態度で教室内外での日常的な質問や応答など英語で円滑なコミュニケーションをとることができない。また、関心のあるトピックについて、200語程度の文章をパラグラフライティングなど論理的文章の構成に留意して書くことができない。
評価項目3	それぞれの国の文化や歴史に敬意を払い、その違いを受け入れる寛容さが必要であることを認識しながら、その国の生活習慣や宗教的信条、価値観などの基本的な事象を自分たちの文化と関連付けて説明、解釈の適用ができる。		それぞれの国の文化や歴史に敬意を払い、その違いを受け入れる寛容さが必要であることを認識しながら、その国の生活習慣や宗教的信条、価値観などの基本的な事象を自分たちの文化と関連付けて説明し、解釈できる。		それぞれの国の文化や歴史に敬意を払い、その違いを受け入れる寛容さが必要であることを認識しながら、その国の生活習慣や宗教的信条、価値観などの基本的な事象を自分たちの文化と関連付けて説明も、解釈もできない。
学科の到達目標項目との関係					
教育方法等					
概要	英語Ⅰ～Ⅴで修得した英語力を活用し、より高度な英語の総合力を養うことを目指す。具体的には、Mary Shelleyの小説Frankenstein(リトルド版)を精読し、適宜原文も取り入れながら、語彙力や読解力を強化し、情報を正確に読み取る力を養う。また朗読を聞くことによってリスニング力を強化し、物語の内容把握や登場人物の心理を理解する。翻訳(映画や舞台)作品にも触れながら、作品について批評し、英語で論じることが出来る力を養う。英文学作品を通して海外の文化や社会について理解を深める。				
授業の進め方・方法	全ての授業内容は、学習・教育到達目標 (A) <視野> [JABEE基準 1 (2)(a)]および(c) <英語> [JABEE基準1(2)(f)]に対応する。				
注意点	<到達目標の評価方法と基準>下記「授業計画」の「到達目標」1～6の習得の度合いを中間試験、期末試験、小テスト、課題により評価する。評価における各「到達目標」の重みの目安は1～5を90%、6を10%とする。試験問題や課題のレベルは、百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。 <学業成績の評価方法および評価基準>学年末の試験の結果を70%、中間小テスト10%、および課題（発表を含む）等の結果を20%として評価する。ただし、試験で60点以上に達していない者には再試験を課すこともあり、再試験の成績が本試験の成績を上回った場合には、60点を上限として本試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。 <単位修得要件>学業成績で60点以上を取得すること。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>TOEIC 400点程度、COCET2600修了程度の語彙知識 <レポートなど> 授業に関する小テスト及び課題を課す。 <備考>授業は講義、及び発表形式で行う。発表者を中心に作品の要約、内容理解を深める。毎回の予習（分からない英単語を調べ、英文を読んで理解しておくこと）および復習を行い、授業において積極的に発言する姿勢が望まれる。授業には必ず英和辞典（電子辞書でも可）を用意すること。				
授業の属性・履修上の区分					
☒ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応	
				☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画					

前期	1stQ	週	授業内容	週ごとの到達目標
		1週	Introduction（授業の進め方および概要説明） Chapter 1 A journey to the North Pole	授業の進め方と発表方法について理解する。 1. 作品の内容やそのテーマを理解できる。 2. 作品で使われている単語や熟語などの表現を理解できる。 3. 作品に関する英語の問いに対して適切な表現で答えられる。 4. 作品の一部を正しい発音で音読することが出来る。 5. 作品の内容の一部を適切な英語で要約できる。 6. 作品の内容についての議論に積極的に参加し、自分の意見を英語で伝えることが出来る。
		2週	Chapter 2 Victor's early years Chapter 3 Ingolstadt University	上記1～6.
		3週	Chapter 3 Ingolstadt University Chapter 4 Victor's Creation	上記1～6.
		4週	Chapter 4 Victor's Creation Chapter 5 Bad News	上記1～6.
		5週	Chapter 5 Bad News Chapter 6 The first month of life	上記1～6.
		6週	Chapter 6 The first month of life Chapter 7 Learning new things	上記1～6.
		7週	Chapter 7 Learning new things Chapter 8 From good to bad	上記1～6.
	8週	中間テスト		
	2ndQ	9週	中間試験の解答解説 Chapter 8 From good to bad Chapter 9 The promise	上記1～6.
		10週	Chapter 9 The promise Chapter 10 The creature returns	上記1～6.
		11週	Chapter 10 The creature returns Chapter 11 A terrible shock	上記1～6.
		12週	Chapter 11 A terrible shock Chapter 12 The wedding night	上記1～6.
		13週	Chapter 12 The Wedding night Chapter 13 The chase	上記1～6.
		14週	Chapter 13 The chase Chapter 14 The ship returns	上記1～6.
		15週	映画鑑賞(英語), ディスカッション	6. 作品の内容についての議論に積極的に参加
16週		舞台鑑賞(日本語), ディスカッション	6. 作品の内容についての議論に積極的に参加	

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標						
分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
評価割合						
		定期試験		課題・発表・小テスト	合計	
総合評価割合		70		30	100	
配点		70		30	100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	総合イノベーション工学実験
科目基礎情報						
科目番号	0005		科目区分		専門 / 必修	
授業形態	実験・実習		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年		専1	
開設期	通年		週時間数		1	
教科書/教材	教科書：実験テーマ毎にテキスト（実験手引き書）等を配布する。					
担当教員	田添 丈博,近藤 邦和,山本 智代,西村 一寛,箕浦 弘人,山口 雅裕,黒飛 紀美					
到達目標						
実験において用いられた専門用語および代表的な実験手法を理解し，データ整理と結果に対する適切な考察を論理的にまとめて報告することができるとともに，専門分野以外の分野の実践的技術の体験を通して必要な基礎的知識を身に付けた上で，習得した知識・能力を超える問題に備えて継続的・自律的に学習し，習得した知識をもとに創造性を発揮し，限られた時間内で仕事を計画的に進め，成果・問題点等を論理的に記述・伝達・討論することができる。						
ルーブリック						
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1		責任感を持ってグループ内で協調して他分野の実験に取り組み，他分野の実験についての的確な図や文章を用いて報告できる。		グループ内で協調して他分野の実験に取り組み，他分野の実験について図や文章を用いて報告できる。		他分野の実験に取り組むことができず，他分野の実験について図や文章を用いて報告できない。
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要		他分野の技術を各自の専門領域に生かし，より発展させるために，他分野の実践的実験技術を体験し身に付ける。機械工学，電気電子工学，電子情報工学，生物応用化学，材料工学に関する基礎的実験を行う。前期は中学生向けの理科教材の開発に取り組み，その実現のために解決すべき課題の発見とその解決法のデザインを体験する。後期は緩やかな制約条件の下でのものづくりに取り組み，その実現のために解決すべき課題の発見とその解決法のデザインを体験する。これらの過程を通して，技術者としてのモチベーション（意欲，情熱，チャレンジ精神など）を涵養し，これまで学んできた学問・技術の応用能力，課題設定力，創造力，継続的・自律的に学習できる能力，プレゼンテーション能力を育成する。なお，理科教材の開発、各テーマにおける実験・製作では，企業でものづくりに関わってきた2人の技術講師が，ものづくりについて実践的なアドバイスをを行いながら実習を実施する。				
授業の進め方・方法		・内容は，学習・教育到達目標(B)<専門><展開>に対応する。 ・授業計画に記載のテーマについて，個人あるいは，数名で構成した班に分かれて実験や製作を行う。 ・「授業計画」における各週の「達成目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。				
注意点		<到達目標の評価方法と基準>前期①～③の実験テーマに関する達成目標1～3の達成度を報告書の内容により評価する。また，④理科教材の開発に関する達成目標4～8の到達度を発表の内容と作品により評価する。評価の重みは①～③の実験を70%，④理科教材の開発を30%とする。後期は，達成目標9～14の達成度を発表(30%)，報告書(50%)および作品(20%)により評価する。発表や報告書に求めるレベルは，100点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。 <学業成績の評価方法および評価基準>基礎的実験において各自に課せられた実験操作・作業およびレポートを30%，理科教材の開発における発表と作品を30%，各テーマにおける実験・製作の発表と報告書と作品を40%として100点満点で学業成績を評価する。 <単位修得要件>与えられた実験テーマの報告書を全て提出し，学業成績で60点以上を取得すること。 <備考>実験の計画・実施に当たっては，必ず指導教員に報告し，その指導に従うこと。器具・装置の使用に当たっては，指導教員から指示された注意事項を守ること。また，本教科は2年次工学実験と深く関係する教科である。				
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	生物応用化学実験(1)（安全講習）		1．専門分野以外の分野の基礎的知識を自主的な学習により身に付けることができる。 2．他分野の実験技術を体験し，その技術や考え方を理解できる。 3．行った基本的な実験等について，目的・結果・考察をまとめ，レポートにすることができる。	
		2週	生物応用化学実験(2)		上記、1、2、3	
		3週	電子情報工学実験(1)		上記、1、2、3	
		4週	電子情報工学実験(2)		上記、1、2、3	
		5週	理科教材の開発①（ガイダンス・テーマ説明，班決定）		4．理科教材の開発を進める上で準備すべき事柄を認識し，継続的に学習することができる。 5．理科教材の開発を進める上で解決すべき課題を把握し，その解決に向けて自律的に学習することができる。 6．理科教材の開発のゴールを意識し，計画的に開発を進めることができる。 7．理科教材の開発を進める過程で自ら創意・工夫することができる。	
		6週	理科教材の開発②（アイディア発表）		上記、4、5、6、7	
		7週	材料工学実験(1)		上記、1、2、3	
		8週	材料工学実験(2)		上記、1、2、3	
	2ndQ	9週	機械工学実験(1)		上記、1、2、3	
		10週	機械工学実験(2)		上記、1、2、3	
		11週	理科教材の開発③（製作）		上記、4、5、6、7	
		12週	理科教材の開発④（製作）		上記、4、5、6、7	
		13週	理科教材の開発⑤（製作）		上記、4、5、6、7	

後期		14週	理科教材の開発⑥（製作）	上記、4、5、6、7
		15週	理科教材の開発⑦（発表会）	8．理科教材の開発の発表会において，理解しやすく工夫した発表をすることができ，的確な討論をすることができる．
		16週		
	3rdQ	1週	電気電子工学実験(1)	上記、1、2、3
		2週	電気電子工学実験(2)	上記、1、2、3
		3週	各テーマにおける実験・製作①（ガイダンス・テーマ説明，班決定）	9．各テーマにおける実験・製作を進める上で準備すべき事柄を認識し，継続的に学習することができる． 10．各テーマにおける実験・製作を進める上で解決すべき課題を把握し，その解決に向けて自律的に学習することができる． 11．各テーマにおける実験・製作のゴールを意識し，計画的に仕事を進めることができる． 12．各テーマにおける実験・製作を進める過程で自ら創意・工夫することができる．
		4週	各テーマにおける実験・製作②（班ごとにテーマ・作業スケジュール等検討，順次作業等始める）	上記、9、10、11、12
		5週	各テーマにおける実験・製作③	上記、9、10、11、12
		6週	各テーマにおける実験・製作④	上記、9、10、11、12
		7週	各テーマにおける実験・製作⑤	上記、9、10、11、12
		8週	各テーマにおける実験・製作⑥	上記、9、10、11、12
	4thQ	9週	各テーマにおける実験・製作⑦	上記、9、10、11、12
		10週	各テーマにおける実験・製作⑧	上記、9、10、11、12
		11週	各テーマにおける実験・製作⑨	上記、9、10、11、12
		12週	各テーマにおける実験・製作⑩	上記、9、10、11、12
		13週	各テーマにおける実験・製作⑪	上記、9、10、11、12
		14週	各テーマにおける実験・製作⑫（発表会）	13．各テーマにおける実験・製作の発表会において，理解しやすく工夫した発表をすることができ，的確な討論をすることができる．
		15週	各テーマにおける実験・製作⑬（報告書の作成・提出）	14．各テーマにおける実験・製作の報告書を論理的に記述することができる．
		16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週	
評価割合						
	前期レポート	前期教材開発・発表・作品	後期発表	後期報告書	作品	合計
総合評価割合	35	15	15	25	10	100
配点	35	15	15	25	10	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	分子生命科学	
科目基礎情報							
科目番号	0006			科目区分	専門 / コース選択必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	参考書：現代生命科学第3版（東京大学生命科学教科書編集委員会）羊土社						
担当教員	山口 雅裕						
到達目標							
細胞の構造と機能およびタンパク質、核酸、糖質等の代謝と機能、遺伝情報の流れとその発現に関する専門知識を修得し、生命科学を理解している。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	遺伝子の構造・機能や発生の仕組みについて理解し、工学的応用について説明できる。			遺伝子の構造・機能や発生の仕組みについて理解している。		遺伝子の構造・機能や発生の仕組みについて理解していない。	
評価項目2	神経による情報伝達の概要を理解し、個々のチャネルやイオンポンプの役割を説明できる。			神経による情報伝達の概要を理解している。		神経による情報伝達の概要を理解していない。	
評価項目3	遺伝情報と生物多様性について理解し、進化によって遺伝的多様性が生じることを説明できる。			遺伝情報と生物多様性について理解している。		遺伝情報と生物多様性について理解していない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	現在、急速に進歩しているライフサイエンスの中核となる学問である分子生命科学を学習する。この科目は、企業・研究所で医薬品の研究や動物発生の研究に携わっていた教員が生命の分子的基盤について講義形式で行うものである。						
授業の進め方・方法	すべての内容は学習・教育目標（B）＜専門＞及びJABEE基準1(1)(d)(2)(a)に対応する。 授業は講義・聴講形式で行う。 「授業計画」における各週の「到達目標」は、この授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする						
注意点	<到達目標の評価方法と基準>「授業計画」における「到達目標」の確認を前期中間試験と前期末試験で行う。「知識能力」に関する重みはおおむね同じである。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。 <学業成績の評価方法および評価基準>前期中間試験の得点が100点満点中60点に満たない場合は、再試験を行い、60点以上だった場合は前期中間試験合格の得点を60点と見なす。 <単位取得要件>学業成績で60点以上を習得すること。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>生物学，化学の知識。本教科は生物学，生物化学や分子生物学の学習が基礎となる教科である。 <備考>自己学習を前提とした規定の単位制に基づき授業を進める。日常の勉強に力を入れること。すべての生物化学教科の全体像を理解することが重要である。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	生命の基礎的な仕組み		1. 生命や細胞の特徴を理解している		
		2週	細胞と遺伝		2. 細胞とDNAの構造，機能，相互の関係を理解している		
		3週	ゲノムと遺伝子		3. 遺伝子を含めたゲノム全体の構造を理解している		
		4週	発生		4. 発生の概要を理解している		
		5週	脳の構造と機能		5. 神経細胞の興奮メカニズムを理解し，神経細胞によって構成される脳の概要を理解している		
		6週	がん		6. がんの病態や原因を理解している		
		7週	栄養と代謝		7. 基本的な異化過程を理解している		
		8週	栄養と代謝		上記7		
	2ndQ	9週	免疫		8. 体液性免疫，細胞性免疫の概要を理解している		
		10週	免疫		上記8		
		11週	生命と環境		9. 生物と環境の関わりを理解している		
		12週	生命と環境		上記9		
		13週	生命科学技术		10. バイオテクノロジーの概要を理解している		
		14週	生命倫理		11. 生命倫理に関連する社会的事象を例示でき，それについて考えることができる		
		15週	生命の理解		12. 科学的な生命に対する理解力を身につけている		
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100
配点	100	0	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	有機化学特論
科目基礎情報						
科目番号	0007		科目区分		専門 / 選択必修	
授業形態	授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年		専1	
開設期	前期		週時間数		2	
教科書/教材	すでに持っている有機化学、高分子化学に関する教科書、板書、必用に応じてプリントを配布する					
担当教員	淀谷 真也					
到達目標						
有機分子（低分子化合物，高分子化合物）に関する構造，物性，化学反応について理解している。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	有機化合物（低分子化合物）の種類，構造，反応について理解している。		有機化合物（低分子化合物）の種類，構造，反応について知っている。		有機化合物（低分子化合物）の種類，構造，反応について知らない。	
評価項目2	有機化合物（高分子化合物）の種類，構造，反応について理解している。		有機化合物（高分子化合物）の種類，構造，反応について知っている。		有機化合物（高分子化合物）の種類，構造，反応について知らない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	有機化合物には低分子化合物と高分子化合物がある。それぞれの基本的な知識と，種類，構造，反応について学習する。					
授業の進め方・方法	・すべての内容は，学習・教育到達目標（B）＜専門＞ ・授業は講義形式で行う。講義中は集中して聴講する。 ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。					
注意点	<到達目標の評価方法と基準> 授業計画の「到達目標」1～13の確認を前期中間試験および前期末試験で行う。評価に対する「到達目標」1～13に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で，目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。 <学業成績の評価方法および評価基準> 前期中間試験と前期末試験の成績を平均して最終評価を行う。再試験は行わない。 <単位修得要件> 学業成績で60点以上を取得すること。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲> 有機化学，高分子化学の基礎を理解している必要がある。 <自己学習> 授業で保証する学習時間と，予習・復習（中間試験，定期試験のための学習も含む）および課題レポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が，90時間に相当する学習内容である。 <備考> 自己学習を前提とした規定の単位制に基づき授業を進める，自己学習に励むこと。					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	有機化合物（I）炭化水素（I）		1. 以下の事項について説明できる。 有機化合物とは，有機化合物の基本	
		2週	有機化合物（II）炭化水素（II）		1. 以下の事項について説明できる。 アルカン、アルケン、アルキンの種類、構造、物性、反応について	
		3週	有機化合物（III）アルコールとエーテル		2. 以下の事項について説明できる。 アルコールとエーテルの種類、構造、物性、反応について	
		4週	有機化合物（IV）カルボニル化合物		3. 以下の事項について説明できる。 カルボニル化合物の種類、構造、物性、反応について	
		5週	有機化合物（V）エステルと油脂		4. 以下の事項について説明できる。 エステルと油脂の種類、構造、物性、反応について	
		6週	有機化合物（VI）芳香族化合物（I）		5. 以下の事項について説明できる。 芳香族化合物の種類、構造、物性、反応について	
		7週	有機化合物（VII）芳香族化合物（II）		上記5.	
		8週	有機化合物まとめ		6. 上記1.～5.のまとめ これまでに学習した内容について説明できる。	
	2ndQ	9週	高分子化合物（I）高分子化合物とは？		7. 以下の事項について説明できる。 高分子化合物の定義と種類	
		10週	高分子化合物（II）分子量の概念と測定法		8. 以下の事項について説明できる。 高分子化合物の分子量についての概念や測定法	
		11週	高分子化合物（III）連鎖重合		9. 以下の事項について説明できる。 ラジカル重合、イオン重合の素反応の機構や速度論	
		12週	高分子化合物（IV）逐次重合		10. 以下の事項について説明できる。 重付加、重縮合、付加縮合など逐次反応の反応機構や速度論	
		13週	高分子化合物（V）種々の重合		11. 以下の事項について説明できる。 種々の重合についての反応機構	
		14週	高分子化合物（VI）高分子化合物の物性		12. 以下の事項について説明できる。 高分子化合物の熱的・力学的挙動について	

		15週	高分子化合物（VII）機能性高分子とまとめ		13.以下の事項について説明できる。 機能性の付与や応用 上記7.～12.のまとめ		
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標		到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	課題レポート	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100
配点	100	0	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	移動現象論
科目基礎情報						
科目番号	0008		科目区分	専門 / コース選択必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専1		
開設期	後期		週時間数	2		
教科書/教材	教科書：なし，ノート講義，参考書：「Transport Phenomena（2nd Edition）」Bird, Stewart, Lightfoot (Wiley)					
担当教員	船越 邦夫					
到達目標						
運動量移動・熱移動・物質移動に関する相似性を理解し，これらの移動過程を記述する微分方程式を導出あるいは利用するための基礎知識を習得し，装置内の運動量・熱・物質の移動過程の計算に利用できる．						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	運動量移動に関する応用的な問題を解くことができる		運動量移動に関する基礎的な問題を解くことができる		運動量移動に関する問題を解くことができない	
評価項目2	熱移動に関する応用的な問題を解くことができる		熱移動に関する基礎的な問題を解くことができる		熱移動に関する問題を解くことができない	
評価項目3	物質移動に関する応用的な問題を解くことができる		物質移動に関する基礎的な問題を解くことができる		物質移動に関する問題を解くことができない	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	移動現象論は，運動量，熱，物質が様々な過程を通じて移動する現象である．本講義では，運動量移動・熱移動・物質移動の類似性を学ぶとともに，移動現象を記述する微分方程式の導き方を学ぶ．この科目は研究所で分散型エネルギーに関する研究を担当していた教員が，その経験を活かし，運動量移動や熱移動，物質移動について授業を行うものである．					
授業の進め方・方法	・すべての授業内容は，学習・教育到達目標(B)<専門>に相当する． ・授業は講義形式で行う． ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で修得する「知識・能力」に相当するものとする．					
注意点	＜到達目標の評価方法と基準＞ 運動量・熱・物質移動現象に関する「知識・能力」1～11の確認を中間試験および期末試験で行う．1～11に関する重みは同じである．合計点の60%の得点で目標の達成を確認できるレベルの試験を課す． ＜学業成績の評価方法および評価基準＞ 中間試験および定期試験の平均点で評価する．中間試験に関しては，評価で60点に達していない者のうち希望者に対して再試験を行い，再試験の成績が該当する期間の評価を上回った場合には，60点を上限として再試験の成績で置き換える．また学業成績が60点に達しない者のうち希望者に対しては期末試験の再試験を実施し，再試験の結果を考慮した成績が最終成績を上回った場合には60点を上限として置き換えるものとする． ・＜単位修得要件＞ 学業成績で60 点以上を取得すること． ＜あらかじめ要求される基礎知識の範囲＞ 本教科は，教養教育科目の数学（微分・積分学の基礎）や物理（力学），化学（物質の状態）は十分に理解しているものとして講義を進め，専門科目である物理化学Ⅰ（相平衡，熱力学），物理化学Ⅱ（反応速度論），情報処理応用，化学設計製図，化学工学Ⅰ（3，4 年），化学工学Ⅱ，化学工学Ⅲ，反応工学，および応用化学コース実験の履修が望ましい． ＜自己学習＞ 授業で保証する学習時間と，予習・復習（中間試験，定期試験のための学習も含む）に必要な標準的な学習時間の総計が，45 時間に相当する学習内容である． ＜注意事項＞ 数式の背景にある物理的意味を充分に理解することが重要である．					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	授業の概要 (運動量移動)Newton の粘性法則，剪断応力の物理的意味，運動量flux	1. Newton の粘性法則，円管内流れの圧力損失について説明できる．		
		2週	円管流れの圧力損失，流れの機構：層流・乱流，Re数	2. 円管内を流れる流体の流動状態について説明できる		
		3週	一次元，二次元，三次元的流れの連続の式	3. 連続の式，Bernoulli の式について説明できる．		
		4週	運動方程式，運動量保存則の応用	4. 運動方程式，運動量保存則について説明できる．		
		5週	Bernoulli の式，管内流れのエネルギー損失	上記4		
		6週	流下液膜流れのshell momentum balance による定式化	5. 流下液膜の流れについて説明できる．		
		7週	中間試験			
		8週	(熱移動)伝熱の機構：伝導，対流，放射 伝導伝熱：Fourier の式，単一平面壁の伝導伝熱	6. 伝熱の機構について説明できる． 7. 伝導伝熱について説明できる．		
	4thQ	9週	多層平面，単一円管，多層円管壁の伝導伝熱	7. 伝導伝熱について説明できる．		
		10週	対流伝熱：境膜伝熱係数，総括伝熱係数	8. 対流伝熱について説明できる．		
		11週	伝熱に関するの無次元数，伝熱問題の考え方	上記8		
		12週	放射伝熱：固体からの熱放射，2 固体間の放射伝熱，放射伝熱係数	9. 放射伝熱について説明できる．		
		13週	(物質移動)Fick の法則，物質移動境膜，物質移動係数	10. 物質移動について説明できる．		
		14週	球体からの物質移動，Ranz-Marshallの式	上記10		
		15週	運動量移動・熱移動・物質移動のアナロジー	11. 運動量移動・熱移動・物質移動のアナロジーについて説明できる．		
		16週				
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標						

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標				到達レベル	授業週
評価割合								
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計	
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100	
配点	100	0	0	0	0	0	100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	エネルギー移送論	
科目基礎情報							
科目番号	0009			科目区分	専門 / コース選択必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻 (環境・資源コース)			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	教科書:「図解 エネルギー工学」平田哲夫・田中誠・熊野寛之・羽田喜昭 (森北出版), 参考書:エネルギー工学に関する参考書は国内, 国外を問わず, 数多く出版され, 図書館にも数多く配備されている.						
担当教員	藤松 孝裕						
到達目標							
熱力学および流体力学に必要な基礎理論, 各種エネルギー利用に関する専門知識などのエネルギー工学全般を学ぶことにより, エネルギー移送システムの設計に応用できる.							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	熱力学の第一法則, 第二法則を理解し, それらに関する応用的な問題を解くことができる.			熱力学の第一法則, 第二法則を理解し, それらに関する基本的な問題を解くことができる.		熱力学の第一法則, 第二法則を理解できない.	
評価項目2	内燃・外燃機関, ガスタービン, 蒸気タービンにおける各種サイクルや熱効率の応用的な問題を解くことができる.			内燃・外燃機関, ガスタービン, 蒸気タービンにおける各種サイクルや熱効率の基本的な問題を解くことができる.		内燃・外燃機関, ガスタービン, 蒸気タービンにおける各種サイクルや熱効率の基本的な問題を解くことができない.	
評価項目3	流体力学の各種理論を理解し, それらに関する応用的な問題を解くことができる.			流体力学の各種理論を理解し, それらに関する基本的な問題を解くことができる.		流体力学の各種理論を理解できない.	
評価項目4	熱・風力・水力・光・化学エネルギーから電気エネルギーへの変換技術を理解し, それらに関する応用的な問題を解くことができる.			熱・風力・水力・光・化学エネルギーから電気エネルギーへの変換技術を理解し, それらに関する基本的な問題を解くことができる.		熱・風力・水力・光・化学エネルギーから電気エネルギーへの変換技術を理解できない.	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	エネルギー問題は今や世界の最大の関心事であり, エネルギー資源に乏しい我が国にとっては, 将来にわたってのエネルギーの安定確保は地球の環境保全対策と相まって, 極めて重要な課題である. 長期的展望に立ち, 種々のエネルギー形態を解明・検討し, 新しいエネルギー形態, エネルギー形態間の変換原理およびそれらの応用を総括的に把握・理解する.						
授業の進め方・方法	・すべての内容は学習・教育到達目標(B)<専門>に対応する. ・授業は講義形式で行う. ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとし, それらにより評価項目の達成を確認する						
注意点	<到達目標の評価方法と基準> エネルギー移送に関する「到達目標」1~8の確認を小テスト, 前期中間試験および前期末試験で行う. 1~8に関する重みはほぼ同じである. 各試験において, 合計点の60%の得点で, 評価項目1~4の達成を確認できるレベルの試験を課す. <学業成績の評価方法および評価基準> 前期中間試験範囲および前期末試験範囲の得点を平均して評価する (小テストの割合は各試験で20~30%とする). 前期中間試験および前期末試験において, 再試験は行わない. <単位修得要件> 学業成績の評価方法によって, 60点以上の評価を受けること. <あらかじめ要求される基礎知識の範囲> 学科での応用物理, 応用数学, 熱力学, 熱工学, 水力学, 流体工学などの科目修得が望ましい. <自己学習> 授業で保証する学習時間 (中間試験を含む) と, 予習・復習に必要な標準的な学習時間の総計が, 90時間に相当する学習内容である. <備考> 学科で習得してきた応用物理, 応用数学, 熱力学, 熱工学, 水力学, 流体工学などで扱われた事項と関連させながら, エネルギー変換工学の原理・応用へと実用的問題に発展させていく. 電子機械工学専攻においては, 機械, 電気, 電子情報工学科などの出身者による複合学科の様相があるので, それぞれの出身以外の分野にまたがるエネルギー形態の勉強に関しては図書館等において, かなり自学・自習が必要である. 学修単位制に基づき授業を進めるため, 日頃から勉強に力を入れること.						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	エネルギーの種類とその変換, 熱力学の理論 (第1法則)		1. 熱力学の第一法則を理解し, それに関する計算ができる.		
		2週	熱力学の理論 (理想気体の状態変化, 第2法則およびエントロピー)		2. 理想気体および熱力学の第二法則を理解し, それらに関する計算ができる.		
		3週	内燃機関 (各種サイクルと熱効率), ガスタービン (各種サイクルと熱効率)		3. 内燃・外燃機関およびガスタービンの各種サイクルを理解し, それらに関する計算ができる.		
		4週	小テスト		上記1, 2		
		5週	蒸気タービン (蒸気の状態変化, 各種サイクルと熱効率)		4. 蒸気およびボイラの各種サイクルを理解し, それらに関する計算ができる.		
		6週	外燃機関 (スターリングエンジン)		上記2		
		7週	前期中間範囲の演習と解説		上記1~4		
		8週	前期中間試験		上記1~4		

2ndQ	9週	火力発電および中間試験解説	5. 熱エネルギーから電気エネルギーへの変換（火力、原子力、地熱、海洋温度差、熱電発電）技術を理解し、それらに関する計算ができる。
	10週	原子力発電、地熱発電および海洋温度差発電	上記5
	11週	流体力学の理論、風力発電（理論、種類、変換効率）	6. 流体力学の各種理論を理解し、それらに関する計算ができる。 7. 風力・水力エネルギーから電気エネルギーへの変換（風力、水力、波力発電）技術を理解し、それらに関する計算ができる。
	12週	小テスト	上記5
	13週	水力発電（理論、種類、変換効率）	上記6, 7
	14週	その他電気エネルギーへの変換（太陽光発電、燃料電池、熱電発電）	8. 光、化学エネルギーから電気エネルギーへの変換（太陽光発電、燃料電池）技術を理解し、それらに関する計算ができる。
	15週	前期末試験範囲の演習	上記6～8
	16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週		
評価割合							
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100
配点	100	0	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	制御機器工学	
科目基礎情報							
科目番号	0010		科目区分		専門 / 選択		
授業形態	授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年		専1		
開設期	前期		週時間数		2		
教科書/教材	教科書：ノート講義、配布プリントを使用 参考書：「シーケンス制御のしくみ 上、下」 青木正夫著（技術評論社）, 「シーケンス制御技術」小野孝治 他著（産業図書）						
担当教員	横山 春喜						
到達目標							
シーケンス制御と制御装置の概要を把握しており、その基礎となる論理代数を理解し、シーケンス回路の読み書きができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1	シーケンス制御と制御装置の概要を説明でき、その知識を応用できる。		シーケンス制御と制御装置の概要を説明できる。		シーケンス制御と制御装置の概要を説明できない。		
評価項目2	論理代数の応用問題を解くことができる。		論理代数の基本問題を解くことができる。		論理代数の基本問題を解くことができない。		
評価項目3	シーケンス回路を設計することができる。		シーケンス回路の読み書きができる。		シーケンス回路の読み書きができない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	この科目は企業で通信用の電子・光デバイスを研究開発していた教員が、その経験を活かし、シーケンス制御の基礎とシーケンス回路の概念等について講義形式で授業を行うものである。						
授業の進め方・方法	・すべての内容は、学習・教育目標(B)＜専門＞に対応する。 ・授業は講義形式で行う。講義中は集中して聴講する。 ・「授業計画」における各週の「達成目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。						
注意点	＜到達目標の評価方法と基準＞ 習得の度合を中間試験、期末試験、レポートにより評価する。評価における「知識・能力」の重みは概ね均等とする。試験問題とレポート課題のレベルは、百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。 ＜学業成績の評価方法および評価基準＞ 中間、期末の2回の試験の平均点で評価する。レポート・小テストを課した場合は、学業成績の15%を上限として評価に組み入れることがある。ただし、中間試験で60点に達していない者には再試験を課し、再試験の成績が中間試験の成績を上回った場合には、60点を上限として中間試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。 ＜単位修得要件＞ 学業成績で60点以上を取得すること。 ＜あらかじめ要求される基礎知識の範囲＞ 自動制御、電気・電子回路及びデジタル回路の基礎知識が必要である。 ＜自己学習＞ 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験のための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。 ＜備考＞ 規定の単位制に基づき、自己学習を前提として授業を進め、自己学習の成果を評価するためにレポート提出を求めるので、日頃から自己学習に励むこと。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	シーケンス制御とは：自動制御、フィードバック制御		1. 制御の概念をつかみ、その目的、制御内容、制御方法などを理解している		
		2週	シーケンス制御装置の種類：リレー、I C		2. 制御装置の種類を分類でき原理、構造、種類を理解している。		
		3週	有接点リレーによる制御装置		上記 2		
		4週	無接点リレーによる制御装置		上記 2		
		5週	I Cによる制御装置		上記 2		
		6週	プログラマブルコントローラ		上記 2		
		7週	シーケンス制御入出力機器		3. 入出力機器の種類と動作を理解している		
		8週	中間試験		これまでに学習した内容を説明できる。		
	2ndQ	9週	論理代数と論理回路について：論理回路、2値論理、基本定理		4. 論理代数の基礎及び基本定理を理解している。		
		10週	シーケンス図の表し方の原則：制御記号、文字記号、器具番号、端子番号、線番号		5. シーケンス回路の表現方法を理解している。		
		11週	シーケンス図の書き方：図記号の位置、器具番号の位置		上記 5		
		12週	各種回路の読み方：反転、直列、並列、自己保持、時限回路		上記 5		
		13週	シーケンス回路の設計		6. シーケンス回路の設計方法の概要を把握している。		
		14週	モータの制御回路：正転、逆転、減電圧始動方法		7. 各種モータの制御回路、インターロック回路の必要性について理解している。		
		15週	インタロック回路		上記 7		
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標				到達レベル	授業週
評価割合								
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計	
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100	
配点	100	0	0	0	0	0	100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	非破壊検査工学
科目基礎情報						
科目番号	0019		科目区分	専門 / 選択必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専1		
開設期	後期		週時間数	2		
教科書/教材	参考書：「非破壊評価工学」（社）日本非破壊検査協会編（日本非破壊検査協会）, 「非破壊検査工学」 石井勇五郎著（産報出版） 他					
担当教員	末次 正寛					
到達目標						
部材中に存在する種々の欠陥に関して、それらが安全上われわれに与える影響を理解し、検出手法の原理や実際、また安全保証システム等についての知識を得ている。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	欠陥が材料強度へ及ぼす影響について理解でき、破壊力学的考察ができる。更に、複雑な問題へ応用できる。		欠陥が材料強度へ及ぼす影響について理解でき、破壊力学的考察ができる。		欠陥が材料強度へ及ぼす影響について理解でき、破壊力学的考察ができない。	
評価項目2	内部欠陥に対する非破壊検査手法について理解し、より複雑な問題へ応用できる。		内部欠陥に対する非破壊検査手法について理解している。		内部欠陥に対する非破壊検査手法について理解していない。	
評価項目3	表面欠陥に対する非破壊検査手法について理解し、より複雑な問題へ応用できる。		表面欠陥に対する非破壊検査手法について理解している。		表面欠陥に対する非破壊検査手法について理解していない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	この科目は、企業で非破壊検査を担当していた教員がその経験を活かし、検査結果の活用法も含めて講義形式の授業を行うものである。実際の生産現場において問題となる材料欠陥について認識し、それらが構造物の破壊強度へ及ぼす影響を理解するとともに、材料あるいは機械構造物中に存在する種々の欠陥を非破壊的に検出する評価手法について学ぶ。さらに、検出された欠陥に対する強度評価法についても、その概略を理解する。					
授業の進め方・方法	・すべての内容は、学習・教育到達目標（B）＜専門＞および JABEE基準基準 1.2(d)(2)a)に対応する。 ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。					
注意点	＜到達目標の評価方法と基準＞ 「授業計画」に示す到達目標 1～10の確認を、中間試験と期末試験で行う。1～10に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。 ＜学業成績の評価方法および評価基準＞ 中間試験、期末試験により評価する。再試験を実施する場合がある。 ＜単位修得要件＞ 学業成績で60点以上を取得すること。 ＜あらかじめ要求される基礎知識の範囲＞ 三角関数と初等関数の微分積分、ならびに材料力学の基礎等。理解に必要なことがらは適宜補足する。本教科は材料学、弾性学の学習が基礎となる教科である。 ＜自己学習＞ 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験のための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。 ＜備考＞ 自己学習を前提とした規定の単位制に基づき授業を進め、課題提出を求めるので、日頃の学習に力を入れること。実際の工業現場で使用されている手法を中心に紹介する。各自興味を持って産業新聞等で情報を集めたり資格制度を調べると良い。本教科は後に学習する物性工学の基礎となる教科である。					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	非破壊検査・非破壊評価の概略		1. 非破壊検査・非破壊評価の概略を把握できる。	
		2週	重大な破壊、破損の事例について		2. 重大な事例をとおして、失敗の原因を把握できる。	
		3週	材料の機械的性質の概略		3. 構造材料の基本的な力学的性質を理解し、評価方法を把握できる。	
		4週	材料の破壊と破損の概略		4. 構造材料の基本的な破壊、破損法則について理解できる。	
		5週	材料・構造物中に存在する不連続部について		5. 材料・構造物中に存在する不連続部についての力学的な取り扱いができる。	
		6週	欠陥が材料強度へ及ぼす影響		6. 欠陥が材料強度へ及ぼす影響について理解できる。	
		7週	き裂材に関する破壊力学的考察		7. き裂材に関する破壊力学的考察ができる。	
		8週	き裂材に関する破壊力学的考察（エネルギー解放率）		8. き裂材に関するエネルギー的な考察ができる。	
	4thQ	9週	き裂材に関する余寿命評価		9. き裂材に関する余寿命評価の原理が理解できる。	
		10週	き裂材に関する余寿命評価		上記 9 き裂材に関する余寿命評価が計算できる。	
		11週	放射線透過試験の概要		10. 放射線透過試験について理解できる。	
		12週	放射線透過試験の実際		上記 10	
		13週	超音波探傷試験の概要		11. 超音波探傷試験について理解できる。	
		14週	超音波探傷試験の実際と応用（可視化手法の理論と高精度化）		上記 11	

		15週	種々の検査手法の紹介, ならびに全範囲のまとめ・解説		上記 1 ～ 1 1		
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標		到達レベル	授業週
評価割合							
			試験		合計		
総合評価割合			100		100		
配点			100		100		

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和05年度 (2023年度)		授業科目	流体力学特論
科目基礎情報						
科目番号	0020		科目区分	専門 / コース選択必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専1		
開設期	前期		週時間数	2		
教科書/教材	教科書：ノート講義 参考書：“FUNDAMENTALS OF FLUID MECHANICS”, Bruce R. Munson et. Al. , (WILEY), JSMEテキストシリーズ「演習 流体力学」, 日本機械学会(丸善)					
担当教員	近藤 邦和					
到達目標						
英語の教科書等を参考にして学習し, 静水力学, 連続の式, ベルヌーイの方程式, 運動量の法則および” Control Volume ”の概念を理解でき, 問題に応用できる.						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	「流体力学」に関する英語の専門用語が十分理解できている.		「流体力学」に関する英語の専門用語が理解できる.		「流体力学」に関する英語の専門用語が理解できていない.	
評価項目2	静水力学について理解し, 応用問題を解くことができる.		静水力学について理解し, 基本的な問題を解くことができる.		静水力学について理解できていない.	
評価項目3	連続の式, ベルヌーイの方程式を理解し, 応用問題を解くことができる.		連続の式, ベルヌーイの方程式を理解し, 基本的な問題を解くことができる.		連続の式, ベルヌーイの方程式を理解できていない.	
評価項目4	運動量の法則を理解し, 応用問題を解くことができる.		運動量の法則を理解し, 基本的な問題を解くことができる.		運動量の法則を理解できていない.	
評価項目5	”Control Volume”の概念を十分理解できている.		”Control Volume”の概念を理解できる.		”Control Volume”の概念を理解できていない.	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	流体力学は, 空気や水に代表される“流体”の静力学と動力学を理論的に取り扱うことを主とする学問である. 「流体力学特論」では, 英語の教科書を参考にして, 流体力学において重要な「静止流体」, 「連続の式」, 「ベルヌーイの方程式」, 「運動量の法則」について学習し, それを応用して問題を解く力を身につける. さらに, 英語での専門用語の知識も身につける.					
授業の進め方・方法	・すべての内容は学習・教育到達目標(B)＜専門＞に対応する. ・オンライン授業では講義および演習を行い, 演習課題を課す. ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする.					
注意点	＜到達目標の評価方法と基準＞ 流体力学特論に関する「到達目標」1～5の習得の度合を中間試験, 期末試験, 課題により評価する. 評価における「知識・能力」の重みは概ね均等とするが, 1, 2は基礎知識として他の問題にも含まれる. 5については全ての問題に関係する. 各試験において, 合計点の60%の得点で, 目標の達成を確認できるレベルの試験を課す. ＜学業成績の評価方法および評価基準＞ 中間試験と定期試験の2回の試験の平均点を80%, 課題の評価を20%として評価する. ただし, 試験で60点に達していない者には再試験を課し, 再試験の成績が試験の成績を上回った場合には, 60点を上限として試験の成績を再試験の成績で置き換える場合がある. ＜単位修得要件＞課題を全て提出し, 学業成績で60点以上を取得すること. ＜あらかじめ要求される基礎知識の範囲＞本教科は水力学や流体工学の学習が基礎となる教科である. ＜自己学習＞授業で保証する学習時間（中間試験を含む）と, 予習・復習および演習レポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が, 90時間に相当する学習内容である. ＜備考＞数式の背景にある, 物理的意味を理解することが重要である. 授業は輪講形式で行うので, 各自担当箇所を予習してくること. また単位制を前提とし, 自宅での学習の時間を保証するための演習問題を課題とするので, 期日までに必ず提出すること.					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	Pressure Variation in a Fluid at Rest	1. 「流体力学」に関する英語の専門用語が理解できる. 2. 静水力学について理解し, 問題に応用できる.		
		2週	Manometry	上記1, 2		
		3週	Hydrostatic Force on a Plane Surface (1)	上記1, 2		
		4週	Hydrostatic Force on a Plane Surface (2)	上記1, 2		
		5週	Hydrostatic Force on a Curved Surface	上記1, 2		
		6週	Continuity Equation for Incompressible Flow	3. 連続の式, ベルヌーイの方程式を理解し, 問題に応用できる.		
		7週	Bernoulli Equation	上記3		
		8週	到達目標1～3の復習	上記1～3		
	2ndQ	9週	到達目標1～3の確認	上記1～3		
		10週	Conservation of Mass—The Continuity Equation(1)	上記1. および4. 運動量の法則を理解し, 問題に応用できる. 5. ”Control Volume”の概念を理解できる.		
		11週	Conservation of Mass—The Continuity Equation(2)	上記1, 4, 5		
		12週	Derivation of the Linear Momentum Equation	上記1, 4, 5		
		13週	Application of the Linear Momentum Equation(1)	上記1. 4. 5		

		14週	Application of the Linear Momentum Equation(2)		上記 1, 4, 5		
		15週	英文での演習問題		上記 1, 4, 5		
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標		到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	80	20	0	0	0	0	100
配点	80	20	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	センサ工学	
科目基礎情報							
科目番号	0037			科目区分	一般 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	「電子計測と制御」 田所 嘉昭 著（森北出版） 参考書：「センサのしくみ」 谷腰 欣司 著（電波新聞社）						
担当教員	西村 一寛						
到達目標							
人間とロボットの対応からセンサの位置づけを理解し、センサの定義、種類、基本構成、動作原理を学ぶとともに、センサを有効に活用するための回路技術を修得することから、センサの応用技術を理解できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		センサに関する応用的な問題が解ける。		センサに関する基本的な問題が解ける。		センサに関する問題が解けない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	産業界における生産現場はもとより、大学等の研究機関において物理情報の検出、測定、解析を行う場合も、センサ関連技術を知っておくことは重要である。この科目では、センサの歴史と役割、センサの種類、基本構成、動作原理を学ぶとともに、センサを有効に活用するための回路技術、センシング応用技術を学ぶ。全15週のうち、第1週から第8週は企業で通信用の電子・光デバイスを研究開発していた者が担当する。						
授業の進め方・方法	・第1週の内容は学習・教育到達目標（A）〈視野〉に相当し、第2週～第16週の内容は学習・教育目標（B）〈専門〉に相当する。 ・授業は講義形式で行う。 ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。						
注意点	<到達目標の評価方法と基準>授業計画の達成目標の1～6の確認を中間試験、期末試験、課題レポートにより評価する。 ・1～6に関する重みは同じである。試験問題のレベルは、百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。 <学業成績の評価方法および評価基準>後期中間、学年末の2回の試験の平均点で評価する。再試験を実施した場合には、60点を上限として評価する。 <単位修得要件>学業成績で60点以上を取得すること。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>電気電子材料、半導体デバイス、電子回路および信号処理に関する基礎知識があることが望ましい。 <自己学習>授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験のための学習も含む）に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。 <備考>規定の単位制に基づき、自己学習を前提として授業を進め、日頃から自己学習に励むこと。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	人間からロボットへ、センサの定義		1. 人間とロボットの対応、センサの定義を説明できる。		
		2週	光センサの種類、ホトダイオード		2. 光センサについて説明できる。		
		3週	ホトトランジスタ、CCD		上記2.		
		4週	CdSセル、光電管、焦電形赤外線センサ		上記2.		
		5週	電磁誘導、センサと指示計器の違い、磁電効果、ホールセンサ		3. 磁気センサについて説明できる。		
		6週	磁気抵抗効果、磁気インピーダンス効果		上記3.		
		7週	磁気センサの応用例		上記3.		
		8週	後期中間試験		上記1.～3.についての試験		
	4thQ	9週	後期中間試験確認、圧力センサ		4. 圧力センサ、温度センサについて説明できる。		
		10週	測温抵抗体、サーミスタ		同上		
		11週	感温フェライト、IC温度センサ、赤外線センサ		同上		
		12週	熱電対、位置センサ		同上		
		13週	位置センサのつづき、超音波センサ		5. 位置センサ、超音波センサについて説明できる。		
		14週	振動センサ		6. 振動センサ、湿度センサ、ガスセンサについて説明できる。		
		15週	湿度センサ、ガスセンサ		同上		
		16週	期末試験		上記4.～6.についての試験		
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合		試験			合計		
総合評価割合		100			100		
配点		100			100		

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	経営学
科目基礎情報						
科目番号	0041		科目区分	一般 / 選択		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専2		
開設期	前期		週時間数	2		
教科書/教材	随時提示					
担当教員	田添 丈博,瀧本 和彦					
到達目標						
1 企業経営に欠かせない基本的な視点を習得することで、企業経営者目線での社会課題を読み解く力を付ける。 2 企業経営における経営計画書の策定手順を習得する。 3 環境分析・経営戦略策定の実践的な実施手法を習得する。 3 企業経営における実践的なリーダーシップ・リスクマネジメント手法を取得する。 これらを習得した結果として、将来の企業経営者として、また創業者（起業家）として経営計画書を作成し、周囲を牽引できる能力を身に付ける。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	社会環境やインフラ変化の影響、経営計画書の策定方法を論理的かつ網羅的に理解できた		社会環境やインフラ変化の影響を理解し、経営計画書の策定方法も理解できた		社会環境やインフラ変化の影響は理解できた	
評価項目2	企業の経営戦略、環境分析ノウハウを理解し、自らで精度よく実践的に対応する能力を身に付けた		企業の経営戦略、環境分析ノウハウを習得した		企業の経営戦略、環境分析を漠然と理解するにとどまった	
評価項目3	リスクマネジメントの理論やリーダーシップ論を理解し、精度よく分析する能力を身に付けた		リスクマネジメントの理論やリーダーシップ論を理解し、基本的な分析ができるレベルに達した		リスクマネジメント論やリーダーシップ論の理論の概念的理解にとどまった	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	社会環境の変化を経営の視点で捉え、これからの企業経営を如何にして組み立て、実践していくかの実践的なノウハウの習得を本講義の目的として教育する。					
授業の進め方・方法	<授業の進め方と授業の内容> 経営計画に関する環境分析・戦略策定、リスクマネジメント、リーダーシップの4点を軸に授業を進める。 ・全ての授業は講義形式で行い、ソクラテスメソッドにより受講生の理解を深めるよう工夫する。 ・授業計画における各週の「到達目標」は、この授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。					
注意点	<到達目標の評価方法と基準> 上記の「知識・能力」の習得の度合は、随時のショートレポートと、課題の経営計画書（環境分析・戦略策定）の2つで評価するものとし、経営計画書は定期試験に置き換えて評価する。評価割合は、レポート30点、課題70点とする。 なお、経営計画書については、環境分析の理解度、環境分析結果の経営計画への反映の精度の2点を主な評価指標とする。 <備考> 講義は、原則、レジュメを配布して進めていく。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲> 特になし。なお、将来、企業経営者や創業者（起業家）を志す学生にマッチした内容となっています。					
授業の属性・履修上の区分						
☒ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	ガイダンス、社会環境		1. オリエンテーション 経営者の視点に立つて、企業経営の基本を理解する。	
		2週	経営戦略論		2. 経営環境の理解 最近の経済情勢と経営環境を理解する。	
		3週	経営戦略論 事業戦略		3. 経営計画書のフレームワーク、経営計画の前提、思考方法、資源配分のためのPPM手法を理解する。	
		4週	経営戦略論 環境分析①		4. 環境分析の目的・意義・全体像、PESTとSPECを理解する。	
		5週	経営戦略論 環境分析②		5. 5Forces分析、バリューチェーン分析のポイントと留意点を理解する。	
		6週	経営戦略論 環境分析③		6. 3C分析、SWOT分析、およびクロスSWOT分析のポイントと留意点を理解する。	
		7週	営業戦略論①		7. 営業プロセス設計と顧客課題の分析手法を理解する。	
		8週	営業戦略論②		8. マーケティング戦略とブランディング戦略を理解する。 【事例研究】	
	2ndQ	9週	経営組織論①		9. 企業会計の仕組みを理解する。 財務3表の仕組みと財務戦略	
		10週	経営組織論②		10. 生産管理戦略を理解する。 業務プロセス改善の仕組みとBPR戦略	
		11週	組織行動論①		11. 組織マネジメント戦略を理解する。 業務・人・情報のマネジメント	
		12週	組織行動論②		12. コミュニケーションのメカニズムを理解する。 【グループワーク】	

		13週	行動経済学	13. 人間が非合理的な決定を行うメカニズムを、認知のクセ、状況、感情の視点から理解する。
		14週	コーポレートガバナンス	14. 企業に内在するリスクを踏まえた真のリスクマネジメントモデルを理解する。
		15週	S D G s	15. S D G s の概要、カーボンニュートラルへの取組を切り口とした企業の付加価値向上戦略を理解する。
		16週	試験（経営計画書またはレポート提出） ※特に優れたものについては、プレゼンを想定	1～15の内容を踏まえ、スタートアップ事業の経営計画書を作成し提出してもらう。

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
----	----	------	-----------	-------	-----

評価割合

	レポート	課題	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	30	70	0	0	0	0	100
配点	30	70	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	言語表現学特論	
科目基礎情報							
科目番号	0042		科目区分	一般 / 選択			
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専2			
開設期	後期		週時間数	2			
教科書/教材	教科書：「日本近代文学選 増補版」（アイブレーン）参考書：「電子辞書」						
担当教員	石谷 春樹						
到達目標							
日本近代文学の中で,代表的な作家の作品を中心に取り上げて,作品を分析することを学び,作品に込められた作者の心情を読み味わうことにより,日本近代文学に関する理解と認識を深めることを目標とする.							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1	日本近代文学を代表する作品の中で、応用的な作品の分析ができる.		日本近代文学を代表する作品の中で、基本的な作品の分析ができる.		日本近代文学を代表する作品の中で、基本的な作品の分析ができない.		
評価項目2	応用的に作品中の作者の心情を読み味わうことができる.		基本的に作品中の作者の心情を読み味わうことができる.		基本的に作品中の作者の心情を読み味わうことができない.		
評価項目3	応用的に日本近代文学に関する理解と認識を深めることができる.		基本的に日本近代文学に関する理解と認識を深めることができる.		基本的に日本近代文学に関する理解と認識を深めることができない.		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	これまで学んできた国語の学習を基礎として,さらに,日本近代文学における代表的な作品の理解を深める. 具体的には,講義によって作品を丁寧に読み分析する方法を身につけ,研究発表によって問題解決能力の養成と表現力の向上を目指す. そのうえで,現代における文学の意義と言語表現の果たす役割について考えることを目標とする.						
授業の進め方・方法	・すべての内容は学習・教育到達目標JABEE基準1(2)の(a)および(f),学習・教育到達目標(A)の〈視野〉および(C)の〈発表〉に対応する. ・全ての授業は講義・演習形式で行う. 授業中は集中して講義に耳を傾けること. ・授業計画における各週の「到達目標」は,この授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする.						
注意点	〈到達目標の評価方法と基準〉下記授業計画の「到達目標」1~6を網羅した問題を,定期試験と研究発表・レポート等で出題し,目標の達成度を評価する. 達成度評価における各到達目標の重みは概ね均等とする. 合計点の60%の得点で,目標の達成を確認できるレベルの試験を課す. 〈学業成績の評価方法および評価基準〉定期試験の結果を60%,研究発表の結果を20%,レポート等の結果を20%として,全体の平均値を最終評価とする. ただし,再試験を行わない. 〈単位修得要件〉与えられた課題レポート等をすべて提出し,学業成績で60点以上を取得すること. 〈あらかじめ要求される基礎知識の範囲〉近代文学を中心とした日本文学史の基礎知識. 〈自己学習・レポートなど〉授業における学習時間と試験勉強を含めた予習及び復習,そして課題レポート準備に必要な標準的学習時間の総計が,90時間に相当する学習内容である. 〈備考〉授業中は講義に集中し,内容に対して積極的に取り組むこと. 出された課題は,期日を守って必ず提出・実施すること. 文学は作者の表現した作品を読み,作者の気持ちを考えることである. そこで授業を通して,人の気持ちを考えることを大切にするため,他人に対する思いやりのある行動を心がけること.						
授業の属性・履修上の区分							
☒ アクティブラーニング		☒ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	本授業の概要および学習内容の説明		1. 作品を一字一句丁寧に読み,作品を読解することができる. 2. さまざまな視点から作品の細部を分析し,自らが問題点を探し,その問題点について考察することができる. 3. 自らの問題点から結論を導く中で,これまでの研究史を把握したうえで,論理的な証明方法によって自分の意見を述べることができる. 4. 自らの作品解釈をもとにした研究成果を,発表することができ,発表を通じて得た問題解決能力を各自の専攻する学問の研究手法に役立てることができる. 5. 研究発表において質疑応答などの討論を通して,相手の意見を理解し,自分の意見を伝えることができる. また,討論を通して文学を学ぶ意義について考えることができる. 6. 研究発表を通して,レポートを作成することができる.		
		2週	研究発表の具体例		上記1~6と同じ.		
		3週	ごん狐 (新美南吉)		上記1~6と同じ.		
		4週	注文の多い料理店 (宮沢賢治)		上記1~6と同じ.		
		5週	羅生門 (芥川龍之介)		上記1~6と同じ.		
		6週	秋 (芥川龍之介)		上記1~6と同じ.		
		7週	点鬼簿 (芥川龍之介)		上記1~6と同じ.		

		8週	骨拾い（川端康成）	上記1～6と同じ。
	4thQ	9週	バッタと鈴虫（川端康成）	上記1～6と同じ。
		10週	ある心の風景（梶井基次郎）	上記1～6と同じ。
		11週	城の崎にて（志賀直哉）	上記1～6と同じ。
		12週	山月記（中島敦）	上記1～6と同じ。
		13週	こころ（夏目漱石）	上記1～6と同じ。
		14週	落下傘（金子光晴）	上記1～6と同じ。
		15週	まとめ	これまで学んだことを復習して，文学を学ぶ意義及び研究方法を自分の専門分野に生かすことができる。
		16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
評価割合					
		試験	課題	発表	合計
総合評価割合		60	20	20	100
配点		60	20	20	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	生命工学	
科目基礎情報							
科目番号	0050			科目区分	一般 / 選択		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	参考書：「生物学におけるランダムウォーク」ハワード・C. バーク,（法政大学出版局）,「生命と物質-生物物理学入門」永山,（東京大学出版会）,「Molecular Biology of the Cell」B. Alberts et.al.,（Garland Science）他						
担当教員	丹波 之宏,山口 雅裕						
到達目標							
生体分子やその集合体の振る舞いの物理科学的な側面からの理解に基づき、細胞内外の情報伝達における分子機構の専門的知識を身に付け、さらに、それらの分子がどのように統合、制御されて細胞および組織としての働きを担っているかについて理解を深める。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安(優)		標準的な到達レベルの目安(良)		未到達レベルの目安(不可)	
評価項目1：生体分子やその集合体の特性を物理科学的に理解している。		生体分子やその集合体の特性を物理科学的に理解し説明できる。		生体分子やその集合体の特性を物理科学的に理解している。		生体分子やその集合体の特性を物理科学的に理解していない。	
評価項目2：細胞膜やそこに存在するタンパク質が果たす生理的機能を理解している。		細胞膜やそこに存在するタンパク質が果たす生理的機能を理解し説明できる。		細胞膜やそこに存在するタンパク質が果たす生理的機能を理解している。		細胞膜やそこに存在するタンパク質が果たす生理的機能を理解していない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	生物学から得られた知見を工学的・医学的に応用するには、その諸現象を物理的な側面から理解しておくことが重要である。講義では生体分子やその集合体の特性の物理科学的な理解に基づき、細胞内外の情報伝達における分子機構の専門的知識を身に付け、さらに、それらの分子がどのように統合、制御されて細胞および組織としての働きを担っているかについて理解を深める。						
授業の進め方・方法	（１）この授業は学習、教育目標（B）＜基礎＞および、JABEE基準1. 1(c)に対応する。（２）「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。						
注意点	（１）到達目標１～4の習得の度を後期中間試験、学年末試験により評価する。評価における「知識・能力」の重みの目安は１～4を各２５％とする。（２）熱力学および電磁気学の基礎を理解していること。（３）生物学の基礎を理解できる能力があること。（４）学年相当の英語力があること。（５）授業で保証する学習時間と、予習・復習（定期試験のための学習も含む）に必要な標準的な学習時間の総計が、９０時間に相当する学習内容である。（６）自己学習を前提として課題の提出を求めることがある。課題の評価は、定期試験に最大２０％まで加味する。（７）中間試験を５０％、学年末試験を５０％として評価し、総合評価で６０％以上の得点を得たものを合格とする。再試験は行わない。（８）単位修得要件として学業成績で６０点以上を取得すること。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	分子の持つエネルギーとその分布（１）		１．統計力学の基礎的な概念に基づき、生体分子やその集合体の特性を理解している。		
		2週	分子の持つエネルギーとその分布（２）		上記１		
		3週	分子の持つエネルギーとその分布（３）		上記１		
		4週	水溶液中での分子やイオンの拡散（１）		上記１		
		5週	水溶液中での分子やイオンの拡散（２）		２．電気化学的な概念に基づき、生体分子やその集合体の特性を理解している、		
		6週	膜を介した粒子の移動（１）		上記２		
		7週	膜を介した粒子の移動（２）		上記２		
		8週	前期中間試験		上記１，２		
	4thQ	9週	膜を介した分子の移動とチャネル・輸送体（１）		３．膜を横切る分子の移動の仕組みについて理解している。		
		10週	膜を介した分子の移動とチャネル・輸送体（１）		上記３		
		11週	膜電位とその生理的機能（１）		４．膜電位とその生理的機能を理解している。		
		12週	膜電位とその生理的機能（２）		上記４		
		13週	核内受容体と遺伝子の発現調節		５．核内受容体の役割について理解している。		
		14週	細胞膜表面受容体とシグナル伝達（１）		６．細胞膜表面受容体の役割について理解している。		
		15週	細胞膜表面受容体とシグナル伝達（２）		上記６		
		16週	細胞膜表面受容体とシグナル伝達（３）		上記６		
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100
配点	100	0	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	物性工学	
科目基礎情報							
科目番号	0051			科目区分	一般 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	教科書：ノート講義 参考書：「無機化学 その現代的アプローチ 第2版」 平尾一之, 田中勝久, 中平敦共著（東京化学同人）「電子物性基礎」 電気学会（オーム社）「物性物理学」 溝口正著（裳華房）「基礎電子物性工学」川辺和夫, 平木昭夫, 若見基弘共著（コロナ社）						
担当教員	和田 憲幸						
到達目標							
物質を構成する元素の構造と性質や、それらの集合体としての結晶が示す回折現象などを理解するとともに、格子振動から比熱求めることを通じて物性の起源を理解する。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	原子の構造を理解し、その電子のエネルギーや波動関数を良く理解している。			原子の構造を理解し、その電子のエネルギーや波動関数を理解している。		原子の構造を理解し、その電子のエネルギーや波動関数を理解していない。	
評価項目2	電子遷移とそれによる光吸収や発光特性をよく理解している。			電子遷移とそれによる光吸収や発光特性を理解している。		電子遷移とそれによる光吸収や発光特性を理解していない。	
評価項目3	レーザー発振や磁気特性と電子状態との関係をよく理解している。			レーザー発振や磁気特性と電子状態との関係を理解している。		レーザー発振や磁気特性と電子状態との関係を理解していない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	この授業では、物質を構成している原子や結晶体の構造、原子間の結合様式、ならびに原子の集合体としての物質の機能（物性）の発現をこれらと密接に関連するいくつかの代表的な物性について講義する。						
授業の進め方・方法	・ 全ての内容は、学習教育到達目標(B)<基礎>に対応 ・ 授業は、質問を受け付けながら、理解の度合いを確認できる演習を含め、講義形式で進める。 ・ 「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。						
注意点	<到達目標の評価方法と基準> この授業で習得する「知識・能力」]1～8の習得の度合を中間試験、期末試験により評価する。試験の重みは同じである。試験問題のレベルは、100点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。 <注意事項> 専門共通科目であるため、下記の基礎知識を復習しながら、いろいろな素養を持った学生が授業を受けることを考慮して、電子遷移や電子スピンの関わる材料の物性について、量子力学の観点からわかりやすく講義する予定である。ただし、開講時間数が少ないため、物性のすべてをここで取り扱うことは不可能である。上記以外の諸物性に関して興味のある人は各自参考書等で勉強すること。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲> 本科ならびに専攻科ですでに習得した量子力学、量子化学に基づき、材料物理学をさらに発展する。 <自己学習> 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験のための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。 <学業成績の評価方法および評価基準> 求められたすべてのレポートの提出をしていなければならない。学業成績の評価は中間・期末の2回の試験の平均点で評価する。ただし、無断欠席の者を除き、60点到達できなかった学生には、再試験を行い、60点を上限として再試験の成績で置き換えるものとする。 <単位修得要件> 学業成績で60点以上を取得すること。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	物質を構成する原子の電子核構造		1. 原子の電子配置と、それを決める4つの量子数の意味を理解している。		
		2週	物質を構成する原子の電子核構造		1. 原子の電子配置と、それを決める4つの量子数の意味を理解している。		
		3週	原子中の電子のエネルギーと波動関数		2. 原子中の電子のエネルギーと波動関数を理解している。		
		4週	原子中の電子のエネルギーと波動関数		2. 原子中の電子のエネルギーと波動関数を理解している。		
		5週	原子中の電子のエネルギーと波動関数		2. 原子中の電子のエネルギーと波動関数を理解している。		
		6週	多電子原子の量子数		3. 多電子原子の量子数を理解している。		
		7週	正八面体配位のポテンシャル		4. 正八面体配位におけるポテンシャルエネルギーを理解している。		
		8週	中間試験		上記1～4		
	2ndQ	9週	摂動法とd電子のエネルギー		5. d電子のエネルギー状態を理解している。		
		10週	d電子のエネルギー		5. d電子のエネルギー状態を理解している。		
		11週	d電子のエネルギー		5. d電子のエネルギー状態を理解している。		
		12週	d電子のエネルギー		5. d電子のエネルギー状態を理解している。		
		13週	遷移金属のd電子の遷移と吸収と発光特性		6. 遷移金属のd電子の遷移と光吸収と発光を理解している。		
		14週	レーザー発振		7. レーザー発振を理解している。		
		15週	磁性		8. 磁性の発現を理解している。		

		16週		
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標				
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル 授業週
評価割合				
	試験	課題	相互評価	態度 発表 その他 合計
総合評価割合	100	0	0	0 0 100
配点	100	0	0	0 0 100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	インターンシップ I	
科目基礎情報							
科目番号	0055			科目区分	一般 / 選択		
授業形態	実験・実習			単位の種別と単位数	学修単位: 1		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2		
開設期	集中			週時間数			
教科書/教材	教科書：特になし, 参考書：インターンシップの手引き						
担当教員	山口 雅裕,近藤 邦和,青山 俊弘,川口 雅司						
到達目標							
技術者が経験する実務上の問題点と課題を体験し, 体験したことを日報や報告書にまとめ, それらをもとに, 発表資料を作成し, それを伝えられる.							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1							
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	技術者が経験する実務上の問題点と課題を体験する.						
授業の進め方・方法	・内容は, 学習・教育到達目標(B)<専門><展開>に対応する. ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする. ・次のインターンシップ機関(以下, 実習機関), 内容および期間で実務上の問題点と課題を体験し, 日報, 報告書, 発表資料を作成し, 発表を行う. 【実習機関】学生の指導が担当可能な企業または公共団体の機関で専攻科分科会の推薦により校長が選定して委属した機関. ただし, 専攻科2年次の就職内定者については, 内定先企業等への実習とする. 【内容】専攻科生が従事できる実務のうち, インターンシップの目的にふさわしい業務 【期間】2週間以上の期間実施した場合において, 実働10日以上19日以下 【日報】毎日, 日報を作成すること. 【課題】インターンシップ終了後に, 報告書を作成し提出すること. 【発表】夏季休暇後にインターンシップ発表会を開催するので, 発表資料を作成し, 発表を行うこと.						
注意点	<到達目標の評価方法と基準>下記授業計画の「到達目標」1～5の習得具合を勤務状況, 勤務態度, 日報, 報告書および発表の項目を総合して評価する. 評価に対する「知識・能力」の各項目の重みは同じである. <学業成績の評価方法および評価基準>「インターンシップの成績評価基準」に定められた配点に従って, 勤務状況, 勤務態度, 日報, 報告書および発表により成績を評価する. <単位修得要件>総合評価で「可」以上を取得すること. <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>心得(時間の厳守(10分前集合), 挨拶, お礼など) <レポートなど>日報は, 毎日, 作成し, 報告書も作成し, 実習指導責任者の検印を受けて, インターンシップ終了後に, 2年学生は専攻主任に, 1年学生は専攻副主任に提出すること. 発表会用に発表資料および発表の準備をすること. <備考>インターンシップの内容は, 専攻科学生が従事できる実務のうち, インターンシップの目的にふさわしい業務であること. 専攻科2年次の就職内定者については, 内定先企業等への実習であること. 実習機関の規則を厳守すること. . 評定書を最終日に受け取ったら, 2年学生は専攻主任または1年学生は専攻副主任に提出すること. インターンシップの手引き, 筆記用具, メモ帳(手帳), 日報, 実習先から指定されている物, 評定書を持参すること.						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週			1. 技術者が経験する実務上の問題点を体験することができる.		
		2週			2. 体験したことを日報にまとめることができる.		
		3週			3. 体験したことを報告書にまとめることができる.		
		4週			4. 体験したことを発表資料にすることができる.		
		5週			5. 体験したことを発表し, 質疑応答することができる.		
		6週					
		7週					
		8週					
	2ndQ	9週					
		10週					
		11週					
		12週					
		13週					
		14週					
		15週					
		16週					
後期	3rdQ	1週					
		2週					
		3週					
		4週					
		5週					

		6週		
		7週		
		8週		
	4thQ	9週		
		10週		
		11週		
		12週		
		13週		
		14週		
		15週		
		16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標					
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
評価割合					
			インターンシップ評価基準	合計	
総合評価割合			100	100	
配点			100	100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	インターンシップⅡ	
科目基礎情報							
科目番号		0056		科目区分		一般 / 選択	
授業形態		実験・実習		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科		総合イノベーション工学専攻 (環境・資源コース)		対象学年		専2	
開設期		集中		週時間数			
教科書/教材		教科書：特になし, 参考書：インターンシップの手引き					
担当教員		山口 雅裕,近藤 邦和,青山 俊弘,川口 雅司					
到達目標							
技術者が経験する実務上の問題点と課題を体験し, 体験したことを日報や報告書にまとめ, それらをもとに, 発表資料を作成し, それを伝えられる.							
ループリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1							
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		技術者が経験する実務上の問題点と課題を体験する.					
授業の進め方・方法		・内容は, 学習・教育到達目標(B)<専門><展開>に対応する. ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする. ・次のインターンシップ機関(以下, 実習機関), 内容および期間で実務上の問題点と課題を体験し, 日報, 報告書, 発表資料を作成し, 発表を行う. 【実習機関】学生の指導が担当可能な企業または公共団体の機関で専攻科分科会の推薦により校長が選定して委属した機関. ただし, 専攻科2年次の就職内定者については, 内定先企業等への実習とする. 【内容】専攻科生が従事できる実務のうち, インターンシップの目的にふさわしい業務 【期間】2週間以上の期間実施した場合において, 実働20日以上29日以下 【日報】毎日, 日報を作成すること. 【課題】インターンシップ終了後に, 報告書を作成し提出すること. 【発表】夏季休暇後にインターンシップ発表会を開催するので, 発表資料を作成し, 発表を行うこと.					
注意点		<到達目標の評価方法と基準>下記授業計画の「到達目標」1～5の習得具合を勤務状況, 勤務態度, 日報, 報告書および発表の項目を総合して評価する. 評価に対する「知識・能力」の各項目の重みは同じである. <学業成績の評価方法および評価基準>「インターンシップの成績評価基準」に定められた配点に従って, 勤務状況, 勤務態度, 日報, 報告書および発表により成績を評価する. <単位修得要件>総合評価で「可」以上を取得すること. <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>心得(時間の厳守(10分前集合), 挨拶, お礼など) <レポートなど>日報は, 毎日, 作成し, 報告書も作成し, 実習指導責任者の検印を受けて, インターンシップ終了後に, 2年学生は専攻主任に, 1年学生は専攻副主任に提出すること. 発表会用に発表資料および発表の準備をすること. <備考>インターンシップの内容は, 専攻科学生が従事できる実務のうち, インターンシップの目的にふさわしい業務であること. 専攻科2年次の就職内定者については, 内定先企業等への実習であること. 実習機関の規則を厳守すること. . 評定書を最終日に受け取ったら, 2年学生は専攻主任または1年学生は専攻副主任に提出すること. インターンシップの手引き, 筆記用具, メモ帳(手帳), 日報, 実習先から指定されている物, 評定書を持参すること.					
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週			1. 技術者が経験する実務上の問題点を体験することができる.		
		2週			2. 体験したことを日報にまとめることができる.		
		3週			3. 体験したことを報告書にまとめることができる.		
		4週			4. 体験したことを発表資料にすることができる.		
		5週			5. 体験したことを発表し, 質疑応答することができる.		
		6週					
		7週					
		8週					
	2ndQ	9週					
		10週					
		11週					
		12週					
		13週					
		14週					
		15週					
		16週					
後期	3rdQ	1週					
		2週					
		3週					
		4週					
		5週					

		6週		
		7週		
		8週		
	4thQ	9週		
		10週		
		11週		
		12週		
		13週		
		14週		
		15週		
		16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標					
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
評価割合					
			インターンシップ評価基準	合計	
総合評価割合			100	100	
配点			100	100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	インターンシップⅢ	
科目基礎情報							
科目番号	0057			科目区分	一般 / 選択		
授業形態	実験・実習			単位の種別と単位数	学修単位: 4		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2		
開設期	集中			週時間数			
教科書/教材	教科書：特になし，参考書：インターンシップの手引き						
担当教員	山口 雅裕,近藤 邦和,青山 俊弘,川口 雅司						
到達目標							
技術者が経験する実務上の問題点と課題を体験し，体験したことを日報や報告書にまとめ，それらをもとに，発表資料を作成し，それを伝えられる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1							
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	技術者が経験する実務上の問題点と課題を体験する。						
授業の進め方・方法	・内容は，学習・教育到達目標(B)<専門><展開>に対応する。 ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。 ・次のインターンシップ機関(以下，実習機関)，内容および期間で実務上の問題点と課題を体験し，日報，報告書，発表資料を作成し，発表を行う。 【実習機関】学生の指導が担当可能な企業または公共団体の機関で専攻科分科会の推薦により校長が選定して委属した機関。ただし，専攻科2年次の就職内定者については，内定先企業等への実習とする。 【内容】専攻科生が従事できる実務のうち，インターンシップの目的にふさわしい業務 【期間】2週間以上の期間実施した場合において，実働30日以上 【日報】毎日，日報を作成すること。 【課題】インターンシップ終了後に，報告書を作成し提出すること。 【発表】夏季休暇後にインターンシップ発表会を開催するので，発表資料を作成し，発表を行うこと。						
注意点	<到達目標の評価方法と基準>下記授業計画の「到達目標」1～5の習得具合を勤務状況，勤務態度，日報，報告書および発表の項目を総合して評価する。評価に対する「知識・能力」の各項目の重みは同じである。 <学業成績の評価方法および評価基準>「インターンシップの成績評価基準」に定められた配点に従って，勤務状況，勤務態度，日報，報告書および発表により成績を評価する。 <単位修得要件>総合評価で「可」以上を取得すること。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>心得(時間の厳守(10分前集合)，挨拶，お礼など) <レポートなど>日報は，毎日，作成し，報告書も作成し，実習指導責任者の検印を受けて，インターンシップ終了後に，2年学生は専攻主任に，1年学生は専攻副主任に提出すること。発表会用に発表資料および発表の準備をすること。 <備考>インターンシップの内容は，専攻科学生が従事できる実務のうち，インターンシップの目的にふさわしい業務であること。専攻科2年次の就職内定者については，内定先企業等への実習であること。実習機関の規則を厳守すること。 ・評定書を最終日に受け取ったら，2年学生は専攻主任または1年学生は専攻副主任に提出すること。インターンシップの手引き，筆記用具，メモ帳(手帳)，日報，実習先から指定されている物，評定書を持参すること。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週			1. 技術者が経験する実務上の問題点を体験することができる。		
		2週			2. 体験したことを日報にまとめることができる。		
		3週			3. 体験したことを報告書にまとめることができる。		
		4週			4. 体験したことを発表資料にすることができる。		
		5週			5. 体験したことを発表し，質疑応答することができる。		
		6週					
		7週					
		8週					
	2ndQ	9週					
		10週					
		11週					
		12週					
		13週					
		14週					
		15週					
		16週					
後期	3rdQ	1週					
		2週					
		3週					
		4週					
		5週					

		6週		
		7週		
		8週		
	4thQ	9週		
		10週		
		11週		
		12週		
		13週		
		14週		
		15週		
		16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標					
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
評価割合					
			インターンシップ評価基準	合計	
総合評価割合			100	100	
配点			100	100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	国際インターンシップ I	
科目基礎情報							
科目番号	0058			科目区分	一般 / 選択		
授業形態	実験・実習			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2		
開設期	集中			週時間数			
教科書/教材	教科書：特になし, 参考書：インターンシップの手引き						
担当教員	山口 雅裕,近藤 邦和,川口 雅司						
到達目標							
国際的に活躍できる技術者が経験する実務上の問題点と課題を体験し, 体験したことを日報や報告書にまとめ, それらをもとに, 発表資料を作成し, それを伝えられる.							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1							
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	技術者が経験する実務上の問題点と課題を体験する.						
授業の進め方・方法	・内容は, 学習・教育到達目標(A)<視野>, (B)<専門><展開>, (C)<英語>に対応する. ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする. ・次のインターンシップ機関(以下, 実習機関), 内容および期間で実務上の問題点と課題を体験し, 日報, 報告書, 発表資料を作成し, 発表を行う. 【実習機関】学生の指導が担当可能な企業または公共団体の機関で専攻科分科会の推薦により校長が選定して委属した機関あるいは国立高等専門学校機構の主催する海外インターンシップ先とする. 【内容】専攻科生が従事できる実務のうち, 国際インターンシップの目的にふさわしい業務 【期間】1週間以上の期間実施した場合において, 実働10日以上19日以下 【日報】毎日, 日報を作成すること. 【課題】インターンシップ終了後に, 報告書を作成し提出すること. 【発表】専攻科分科会で定める時期にインターンシップ発表会を開催するので, 発表資料を作成し, 発表を行うこと.						
注意点	<到達目標の評価方法と基準>下記授業計画の「到達目標」1～6の習得具合を勤務状況, 勤務態度, 日報, 報告書および発表の項目を総合して評価する. 評価に対する「知識・能力」の各項目の重みは同じである. <学業成績の評価方法および評価基準>「インターンシップの成績評価基準」に定められた配点に従って, 勤務状況, 勤務態度, 日報, 報告書および発表により成績を評価する. <単位修得要件>総合評価で「可」以上を取得すること. <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>心得(時間の厳守(10分前集合), 挨拶, お礼など) <レポートなど>日報は, 毎日, 作成し, 報告書も作成し, 実習指導責任者の検印を受けて, インターンシップ終了後に, 2年学生は専攻主任に, 1年学生は専攻副主任に提出すること. 発表会用に発表資料および発表の準備をすること. <備考>インターンシップの内容は, 専攻科学生が従事できる実務のうち, 国際インターンシップの目的にふさわしい業務であること. 実習機関の規則を厳守すること. 評定書を最終日に受け取ったら, 2年学生は専攻主任または1年学生は専攻副主任に提出すること. インターンシップの手引き, 筆記用具, メモ帳(手帳), 日報, 実習先から指定されている物, 評定書を持参すること.						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週			1. 国際的に活躍できる技術者が経験する実務上の問題点を体験することができる.		
		2週			2. 実践的国際感覚が分かり, それらを体得できる.		
		3週			3. 体験したことを日報にまとめることができる.		
		4週			4. 体験したことを報告書にまとめることができる.		
		5週			5. 体験したことを発表資料にすることができる.		
		6週			6. 体験したことを発表し, 質疑応答することができる.		
		7週					
		8週					
	2ndQ	9週					
		10週					
		11週					
		12週					
		13週					
		14週					
		15週					
		16週					
後期	3rdQ	1週					
		2週					
		3週					
		4週					
		5週					

		6週			
		7週			
		8週			
	4thQ	9週			
		10週			
		11週			
		12週			
		13週			
		14週			
		15週			
		16週			
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標					
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
評価割合					
		国際インターンシップ評価基準		合計	
総合評価割合		100		100	
配点		100		100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	国際インターンシップⅡ	
科目基礎情報							
科目番号	0059			科目区分	一般 / 選択		
授業形態	実験・実習			単位の種別と単位数	学修単位: 4		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2		
開設期	集中			週時間数			
教科書/教材	教科書：特になし, 参考書：インターンシップの手引き						
担当教員	山口 雅裕,近藤 邦和,川口 雅司						
到達目標							
国際的に活躍できる技術者が経験する実務上の問題点と課題を体験し, 体験したことを日報や報告書にまとめ, それらをもとに, 発表資料を作成し, それを伝えられる.							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1							
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	技術者が経験する実務上の問題点と課題を体験する.						
授業の進め方・方法	・内容は, 学習・教育到達目標(A)<視野>, (B)<専門><展開>, (C)<英語>に対応する. ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする. ・次のインターンシップ機関(以下, 実習機関), 内容および期間で実務上の問題点と課題を体験し, 日報, 報告書, 発表資料を作成し, 発表を行う. 【実習機関】学生の指導が担当可能な企業または公共団体の機関で専攻科分科会の推薦により校長が選定して委属した機関あるいは国立高等専門学校機構の主催する海外インターンシップ先とする. 【内容】専攻科生が従事できる実務のうち, 国際インターンシップの目的にふさわしい業務 【期間】2週間以上の期間実施した場合において, 実働20日以上29日以下 【日報】毎日, 日報を作成すること. 【課題】インターンシップ終了後に, 報告書を作成し提出すること. 【発表】専攻科分科会で定める時期にインターンシップ発表会を開催するので, 発表資料を作成し, 発表を行うこと.						
注意点	<到達目標の評価方法と基準>下記授業計画の「到達目標」1～+6の習得具合を勤務状況, 勤務態度, 日報, 報告書および発表の項目を総合して評価する. 評価に対する「知識・能力」の各項目の重みは同じである. <学業成績の評価方法および評価基準>「インターンシップの成績評価基準」に定められた配点に従って, 勤務状況, 勤務態度, 日報, 報告書および発表により成績を評価する. <単位修得要件>総合評価で「可」以上を取得すること. <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>心得(時間の厳守(10分前集合), 挨拶, お礼など) <レポートなど>日報は, 毎日, 作成し, 報告書も作成し, 実習指導責任者の検印を受けて, インターンシップ終了後に, 2年学生は専攻主任に, 1年学生は専攻副主任に提出すること. 発表会用に発表資料および発表の準備をすること. <備考>インターンシップの内容は, 専攻科学生が従事できる実務のうち, 国際インターンシップの目的にふさわしい業務であること. 実習機関の規則を厳守すること. 評定書を最終日に受け取ったら, 2年学生は専攻主任または1年学生は専攻副主任に提出すること. インターンシップの手引き, 筆記用具, メモ帳(手帳), 日報, 実習先から指定されている物, 評定書を持参すること.						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週			1. 国際的に活躍できる技術者が経験する実務上の問題点を体験することができる.		
		2週			2. 実践的国際感覚が分かり, それらを体得できる.		
		3週			3. 体験したことを日報にまとめることができる.		
		4週			4. 体験したことを報告書にまとめることができる.		
		5週			5. 体験したことを発表資料にすることができる.		
		6週			6. 体験したことを発表し, 質疑応答することができる.		
		7週					
		8週					
	2ndQ	9週					
		10週					
		11週					
		12週					
		13週					
		14週					
		15週					
		16週					
後期	3rdQ	1週					
		2週					
		3週					
		4週					
		5週					

		6週			
		7週			
		8週			
	4thQ	9週			
		10週			
		11週			
		12週			
		13週			
		14週			
		15週			
		16週			
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標					
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
評価割合					
		国際インターンシップ評価基準		合計	
総合評価割合		100		100	
配点		100		100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	総合イノベーション工学輪講	
科目基礎情報							
科目番号	0033			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	演習			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	教科書：各指導教員に委ねる。参考書：各指導教員に委ねる。						
担当教員	山口 雅裕,近藤 邦和						
到達目標							
特別研究に関連する国内外の論文の検索を行うことができ、輪講した論文の内容を論理的かつ明確に説明する能力を持つことができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1							
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	特別研究に関連した国内外の論文などを講読を或いは輪読して基本的事項を理解し、最近の研究動向を知るとともに、その内容をまとめて紹介する能力を培う。さらに、質疑応答などにより内容を発展させ、特別研究を進める上での基礎を培う。						
授業の進め方・方法	全ての内容は、学習・教育到達目標(B)＜専門＞＜展開＞、(C)＜英語＞＜発表＞〔JABEE基準1(2)(d)(2)a),(f),(h)〕に対応する。 特別研究を発展させる上で必要な基本的な文献、および最近の国内外の論文資料を講読或いは輪読し、研究動向を知るとともに、内容の解説、紹介および質疑応答を通して、技術者として不可欠な文献の理解力と発表能力を培う。また、最新の文献を入手するために必要な、データベース等を利用する文献検索の方法を修得する。 特別研究のテーマに関連したもので、以下の分野から選択する。 1. ＜機械工学＞ 機械力学、材料力学、計算力学、有限要素法、計算機援用工学、弾性学、熱力学、熱工学、流体工学、気液混相流、液体の微粒化、精密工学、機械工作法、精密加工、制御工学、応力ひずみ解析、真空工学等 2. ＜電気・電子工学＞ 高電圧工学、送配電工学、電子工学、電子回路、電子物性、放電物理、固体電子工学、集積回路工学、情報科学、知能情報学、ニューラルネットワーク、パターン認識、画像処理工学、制御工学、電子線機器学等 3. ＜電子情報工学＞ 電子工学、半導体デバイス、情報電子回路、電子計測、環境電磁工学、放電応用、超真空工学、電磁エネルギー工学、情報制御システム、バイオロボティクス、情報工学、通信伝送工学、自然言語処理、パーソナルリアリティ等 4. ＜生物応用化学＞：化学工学、分離工学、プロセス工学、反応工学、反応有機工学、理論有機化学、有機合成化学、有機光化学、過酸化物化学、機器分析化学、バイオテクノロジー(植物)、分子移動工学、生化学、分子生物学、蛋白質化学、生理学、薬理学、口腔生化学、微生物学、蛋白質工学、プロセス工学、分離工学、粉体工学、分子遺伝学、遺伝子工学、生物工学、創薬化学、無機材料科学、無機合成化学等 5. ＜材料工学＞：材料物性、機能材料、知能材料、材料化学、材料組織、材料強度、材料プロセス、金属材料、無機材料、セラミックス工学、有機材料、複合材料、工業物理化学、応用電気化学、無機材料、電気化学、表面処理、材料リサイクル、材料加工学、非鉄金属材料、材料設計、医用材料、結晶成長、熱表面処理工学、環境科学、蛋白質工学、有機材料工学等						
注意点	＜到達目標の評価方法と基準＞下記授業計画の「達成目標」1～3の習得度を輪読およびそれらに関するレポートの内容により評価する。1～3に関する重みは同じである。輪講とレポートのレベルは、合計点の60%の点数を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。 ＜学業成績の評価方法および評価基準＞各自に課せられた論文の輪講およびそれらに関するレポートの結果により学業成績を評価する。 ＜単位修得要件＞学業成績で60点以上を取得すること。 ＜あらかじめ要求される基礎知識の範囲＞特別研究Ⅱに関連する基礎的知識ならびに周辺技術についての知識。 ＜備考＞論文あるいは専門書の選定には特別研究の指導教員と十分に相談すること。また、周辺分野の基本的な事項にも十分な関心を払うこと。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週			1. 特別研究に関する国内外（海外のものについては特に英文論文）の論文の講読あるいは輪読ができる。		
		2週			2. 論文の検索方法が修得でき、関連する先行研究について論文の調査ができる。		
		3週			3. 講読あるいは輪読した論文について、内容をまとめることができ、指導教員に内容を明確に説明することができる。		
		4週					
		5週					
		6週					
		7週					
		8週					
	2ndQ	9週					
		10週					
		11週					
		12週					
		13週					
		14週					

		15週		
		16週		
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標				
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル 授業週
評価割合				
		輪講・レポート	合計	
総合評価割合		100	100	
配点		100	100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	生体機能工学
科目基礎情報						
科目番号	0036		科目区分	専門 / コース選択必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専2		
開設期	前期		週時間数	2		
教科書/教材	教科書： 使用しない。 配布資料およびノート。 参考書：「細胞の分子生物学」ALBERTS/ JOHNSON/ LEWIS/RAFF/ ROBERTS/ WALTER 著 中村桂子, 松原謙一 監訳 ニュートンプレス 第5版 ほか					
担当教員	今田 一姫					
到達目標						
生体および生体分子の特徴や機能に関する専門的事項を理解し、バイオテクノロジーへ応用することができる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	様々な生体分子がどのような構造をつくるか説明できる。		代表的な生体分子について説明できる。		代表的な生体分子について説明できない。	
評価項目2	生体分子の応用例を挙げ、どのような特性が用いられているのか説明できる。		生体分子の応用例を挙げることができる。		生体分子の応用例を挙げることができない。	
評価項目3	分子レベル捉えることによって生命現象が応用できる可能性を説明できる。		生命現象を分子レベルで説明することができる。		生命現象を分子レベルで捉えることができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	生体を構成する核酸、タンパク質、多糖、脂質などの生体分子は、それぞれ独立して働いているだけでなく、互いに関与し合って働く。また、生体分子からなる細胞・組織・個体は、さらに発展的な機能を持つに至る。ここでは、初めに生体分子の構造と機能を理解した後、生体分子と生体自体のバイオテクノロジーへの応用化について学ぶ。					
授業の進め方・方法	・すべての授業内容は、学習・教育到達目標(B)<専門>、JABEE基準1(2)(d)(2)a)に相当する。 ・授業は講義形式で行う。 ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で修得する「知識・能力」に相当するものとする。					
注意点	<到達目標の評価方法と基準>上記の「知識・能力」1～14の習得の度合いを中間試験、期末試験により評価する。 ・1～14に関する重みは同じである。合計点の60%の点数を得ることによって目標の達成が確認できるレベルの試験を課す。 <学業成績の評価方法および評価基準>後期中間・学年末の2回の試験の平均を100%として評価する。ただし、各試験において、授業中に課したレポート課題を約20%の割合で出題する。再試験は行わない。 <単位修得要件>学業成績で60点以上を取得すること。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>本教科の学習には、生物化学，基礎細胞生物学，微生物学，分子生物学，細胞工学，生物化学工学，タンパク質化学，生物情報工学，生体材料工学，分子生命科学（専攻科）の習得が必要である。 <自己学習>授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験，定期試験のための学習も含む）に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。 <注意事項>各項目でキーワードをあげるのので、これらについて必ず理解すること。					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	生体内の分子，タンパク質の構造・機能とその制御	1. 生体内の分子の働きの概要を説明できる。タンパク質の構造と働き方，利用例を説明できる。		
		2週	核酸と糖鎖の性質と構造	2. 生体高分子のうち，核酸と糖鎖の構造と働き方，利用例を説明できる。		
		3週	生体膜と生体膜間輸送，ウイルス	3. 両親媒性分子がつくる構造を説明できる。膜タンパク質について説明できる。ウイルスの構造と増殖方法を説明できる。		
		4週	酵素反応とその利用，タンパク質のスイッチ	4. 酵素の性質と利用例を説明できる。他の分子との結合や翻訳後修飾による，タンパク質の構造変化と機能調節について説明できる。		
		5週	生体機能を使った検出器	5. 酵素や抗体といった分子や微生物細胞の検出器としての利用例を説明できる。核酸を用いたウイルス検査やDNA鑑定について説明できる。		
		6週	細胞内の相転移と相分離，細胞骨格と分子モーター	6. 細胞内における粘弾性相分離やタンパク質凝集による構造物や生体機能調節，発病について説明できる。細胞内の繊維状構造とリニアモータータンパク質，回転モータータンパク質について説明できる。		
		7週	食品生産・農業と微生物バイオテクノロジー	7. 食品としての光合成微生物について説明できる。微生物農業について説明できる。アグロバクテリウムと遺伝子組換え作物について説明できる。		
		8週	前期中間試験	これまでに学習した内容を，例を挙げたり，説明することができる。		
	2ndQ	9週	生物機能の医療への応用(1)	8. 抗生物質，ワクチンについて説明できる。インスリンの生産・改良について説明できる。分子標的薬と抗体医薬について説明できる。		
		10週	生物機能の医療への応用(2)	9. 癌細胞が生じる様々な原因や癌化した組織で起こっている現象について説明できる。癌の検出，抗癌剤，癌治療薬について説明できる。		

		11週	環境バイオテクノロジー 排水処理・汚染物質の除去	10. 未処理排水の放出による環境への影響を説明できる。微生物を用いた排水中の有機物、窒素、リンの除去について説明できる。生物機能を用いた環境浄化について説明できる。
		12週	遺伝現象の応用	11. 突然変異と交配による進化と育種の関係について説明できる。ゲノム編集と遺伝子組換えによる育種について説明できる。
		13週	進化と生物多様性	12. 進化の原理と生物多様性について説明できる。生態系サービスについて例を挙げて説明できる。人間の活動による生態系への影響について説明できる。
		14週	バイオメテックス	13. バイオメテックスについて例を挙げて説明できる。
		15週	再生医療と幹細胞 生体機能の利用	14. 細胞を用いた人工臓器について説明できる。ウイルス等によるDDSを用いた遺伝子治療について説明できる。
		16週		

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
評価割合					
		試験	レポート	合計	
総合評価割合		100	0	100	
配点		100	0	100	

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	電気理論特論
科目基礎情報						
科目番号	0038			科目区分	専門 / 選択	
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2	
開設期	前期			週時間数	2	
教科書/教材	板書講義					
担当教員	西村 高志					
到達目標						
電気回路網を有向グラフで表現し行列を用いて定式化でき、具体的問題へ応用することができる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1	グラフの定義とその要素（木,リンク,閉路,カットセットなど）を理解でき,問題へ応用することができる。			グラフの定義とその要素（木,リンク,閉路,カットセットなど）を理解できる。		グラフの定義とその要素（木,リンク,閉路,カットセットなど）を理解できない。
評価項目2	有向グラフを接続行列や閉路行列,カットセット行列へ定式化でき,問題へ応用できる。			有向グラフを接続行列や閉路行列,カットセット行列へ定式化できる。		有向グラフを接続行列や閉路行列,カットセット行列へ定式化できない。
評価項目3	キルヒホッフの法則を行列で表現でき,リンク電流と木の枝電流の関係,講義の電流則を理解でき,問題へ応用できる。			キルヒホッフの法則を行列で表現でき,リンク電流と木の枝電流の関係,講義の電流則を理解できる。		キルヒホッフの法則を行列で表現でき,リンク電流と木の枝電流の関係,講義の電流則を理解できない。
評価項目4	閉路方程式,カットセット方程式,接点方程式を導入でき,実際の電気回路網の解析へ応用できる。			閉路方程式,カットセット方程式,接点方程式を用いて実際の電気回路網の解析ができる。		閉路方程式,カットセット方程式,接点方程式を用いて実際の電気回路網の解析ができない。
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	大規模な電気回路網を効率的に解析できる手法の一つにグラフ理論を用いた方法がある。本講義ではこの方法を習得し,電気回路網解析へ応用できる能力を習得する.この科目は企業で電子ビーム応用機器の研究開発を行っていた教員が,その経験を活かして電子回路の最新の解析手法について講義形式で授業を行うものである。					
授業の進め方・方法	・ すべての内容は、学習・教育到達目標（B）＜専門＞およびJABEE基準1.2(d)に対応する。 ・ 授業は講義形式で行う。 ・ 「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。					
注意点	<到達目標の評価方法と基準>授業計画の「到達目標」1～14の習得の度合を期末試験により評価する。評価における「到達目標」の重みは均等とする。試験問題のレベルは、百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。 <学業成績の評価方法および評価基準>定期試験の得点で評価する。 <単位修得条件>学業成績で60点以上を取得すること。 <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>数学および電気回路の一般的な基礎知識。 <レポート等>理解を深めるため課題を適宜与える。 <備考>日頃から自己学習に励むこと。					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	授業概要		1. グラフ理論を用いた回路網解析の概要を理解できる。	
		2週	グラフ理論(1)		2. グラフの定義, 木と補木を理解できる。	
		3週	グラフ理論(2)		3. 閉路, カットセットに関して理解できる。	
		4週	グラフ理論(3)		4. 閉路とカットセットの関係, 双対グラフと双対回路に関して理解できる。	
		5週	有向グラフの行列表現(1)		5. 接続行列と閉路行列に関して理解できる。	
		6週	有向グラフの行列表現(2)		6. カットセット行列, 接続行列と閉路行列の関係を理解できる。	
		7週	有向グラフの行列表現(3)		7. 閉路行列とカットセット行列の関係, 三つの行列の関係を理解できる。	
		8週	キルヒホッフの法則の行列表現(1)		8. キルヒホッフの法則と電流則の行列方程式を理解できる。	
	2ndQ	9週	キルヒホッフの法則の行列表現(2)		9. リンク電流と木の枝電流の関係, カットセットと広義の電流則を理解できる。	
		10週	キルヒホッフの法則の行列表現(3)		10. 閉路電流の定義, 電圧則の行列方程式, カットセットと広義の電圧則を理解できる。	
		11週	回路方程式の解法(1)		11. 変数変換, 閉路方程式を理解できる。	
		12週	回路方程式の解法(2)		12. カットセット方程式, 接点方程式を理解できる。	
		13週	回路方程式の解法(3)		13. グラフ理論による回路方程式の解法を説明することができる。	
		14週	演習(1)		14. グラフ理論による回路網解析を実際の電気回路へ応用できる。	
		15週	演習(2)		14. グラフ理論による回路網解析を実際の電気回路へ応用できる。	

		16週		
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標				
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル 授業週
評価割合				
	試験	課題	相互評価	態度 発表 その他 合計
総合評価割合	100	0	0	0 0 100
配点	100	0	0	0 0 100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	電子材料特論	
科目基礎情報							
科目番号	0047		科目区分		専門 / 選択		
授業形態	授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年		専2		
開設期	前期		週時間数		2		
教科書/教材	参考書「電気・電子材料」, 中澤達夫 他著（コロナ社）						
担当教員	伊藤 明,西村 一寛						
到達目標							
磁性材料, 誘電体材料, 超電導材料, 半導体, 光・電子材料の基礎知識を理解し, 新素材として, それらのセンサ用材料としての特性を理解している.							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		各種材料に関する応用的な問題が解ける.		各種材料に関する基本的な問題が解ける.		各種材料に関する問題が解けない.	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		材料技術の進歩には目を見張るものがあり, 「材料を制するものは産業を制する」といわれるほどに, 材料の重要性が認知されるようになった. 科学技術のあらゆる分野での基盤をなすものとしての材料を新しい観点で見直し, 材料および素材への技術者としての認識を深めることを目的とする. 授業では主としてセンサ用材料を取り上げ, その特性を中心として学習する.					
授業の進め方・方法		・すべての内容は, 学習・教育到達目標(B)＜専門＞およびJABEE基準1.2(d)(1)に対応する. ・授業は講義形式で行う. ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする.					
注意点		<到達目標の評価方法と基準>授業計画の「到達目標」1～10の習得の度合を中間試験, 期末試験, レポートにより評価する. 評価における「到達目標」の重みは1・2を各15%, 3・4を各7%, 5を6%, 6～10を各10%とする. ・試験問題とレポート課題のレベルは, 百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する. <学業成績の評価方法および評価基準>中間試験, 定期試験の2回の試験の平均点で評価する. 再試験を実施した場合には, 60点を上限として評価する. レポートを実施した場合には, 試験の結果を80%, 課題(レポート)を20%で評価する. <単位修得条件>学業成績で60点以上を取得すること. <あらかじめ要求される基礎知識の範囲>物理および化学の一般的な基礎知識. <自己学習>授業では取り上げることができない分野での素材等については各自参考文献などにより学習してもらいたい. また, 課題提出を求めたり小テストを行うなどして自己学習の成果に対する評価を実施することもある. 授業で保証する学習時間と, 予習・復習(中間試験, 定期試験のための学習も含む)及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が, 90時間に相当する学習内容である. <備考>規定の単位制に基づき, 自己学習を前提として授業を進め, 自己学習の成果を評価するためにレポート提出を求めるので, 日頃から自己学習に励むこと.					
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	磁性体の種類, 磁気モーメント		1. 磁気材料に関する基礎的事項を理解している.		
		2週	磁化曲線と磁化過程, (BH)max		1. 磁気材料に関する基礎的事項を理解している.		
		3週	磁気モーメントの合成と反磁界, 磁気異方性		1. 磁気材料に関する基礎的事項を理解している.		
		4週	磁化の温度変化, 硬質磁性材料, 軟質磁性材料, 半硬質磁性材料, その他の磁性材料		2. 各種磁性材料の特徴などについて理解している.		
		5週	誘電体, 誘電現象, 複素誘電率と誘電率の周波数特性		3. 誘電材料に関する基礎的事項を理解している.		
		6週	圧電体, 焦電体, 圧電体・焦電体の応用例, 磁性材料・誘電材料の新しい応用展開		4. 各種誘電材料の特徴などについて理解している.		
		7週	超電導材料		5. 超電導材料に関する基礎的事項を理解している.		
		8週	中間試験		上記1. ～5. に関する試験		
	2ndQ	9週	中間試験の確認, シリコンの結晶成長		6. シリコン, 化合物半導体の基礎的事項を理解している.		
		10週	化合物半導体の結晶成長		6. シリコン, 化合物半導体の基礎的事項を理解している.		
		11週	半導体発光素子Ⅰ		7. 光ファイバーに関する基礎的事項を理解している.		
		12週	半導体発光素子Ⅱ		7. 光ファイバーに関する基礎的事項を理解している.		
		13週	受光素子		9. 受光素子の原理に関しての基礎的事項を理解している.		
		14週	発光素子		8. 発光素子の原理に関しての基礎的事項を理解している.		
		15週	機能性炭素材料		10. 機能性炭素材料の基礎的事項を理解している.		
		16週	期末試験		上記6. ～10. に関する試験		
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標			到達レベル	授業週
評価割合							

	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	80	20	0	0	0	0	100
配点	80	20	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	有機材料工学	
科目基礎情報							
科目番号		0052		科目区分		専門 / コース選択必修	
授業形態		授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科		総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年		専2	
開設期		後期		週時間数		2	
教科書/教材		教科書：工学のための高分子材料化学（川上浩良著，サイエンス社）及び配布プリント，参考書：入門高分子材料設計（高分子学会編，共立出版），高分子材料概論（鴨川昭夫，五十嵐哲共著，森北出版）					
担当教員		下古谷 博司					
到達目標							
1.高分子化合物の種類，構造，性質，合成法等を理解し，各種高分子化合物について説明できる。 2.分離・分子認識材料や環境浄化材料など各種高分子材料の構造や性質を理解し，その機能について説明できる。 3.繊維強化プラスチックの種類，構造，性質，成形法等を理解し，プラスチック基複合材料について説明できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		高分子化合物の種別や物性，合成法等を理解し，各種高分子化合物の設計に応用できる。		高分子化合物の種別や物性，合成法等を理解し，各種高分子化合物について説明できる。		高分子化合物の種別や物性，合成法等を理解できず，各種高分子化合物について説明できない。	
評価項目2		各種高分子材料の構造及び性質等とその機能との関係を理解し，機能性高分子材料の設計に応用できる。		各種高分子材料の構造や性質を理解し，その機能について説明できる。		各種高分子材料の構造や性質を理解できず，その機能について説明できない。	
評価項目3		繊維強化プラスチックの種類や性質を理解し，プラスチック基複合材料の設計に応用できる。		繊維強化プラスチックの種類や性質を理解し，プラスチック基複合材料について説明できる。		繊維強化プラスチックの種類や性質を理解できず，プラスチック基複合材料について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		高分子化合物は天然系から合成系まで幅広く存在する。授業では，それらの構造と性質など基本的な事項から，高分子化合物の設計法や分離・認識材料，バイオマテリアル，環境保全材料などの機能的特性を理解し，さらにはプラスチック基複合材料の成型法に至るまで幅広く学ぶ。					
授業の進め方・方法		・すべての内容は学習・教育到達目標（B）＜専門＞，JABEE基準1(2)(d)(2)a)に対応する。 ・授業は講義形式で行う。講義中は集中して聴講する。 ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。					
注意点		＜到達目標の評価方法と基準＞下記授業計画の「到達目標」の習得度を中間試験，期末試験，レポートにより評価する。評価における「到達目標」の重みは同じである。試験問題とレポート課題のレベルは，百分法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。 ＜あらかじめ要求される基礎知識の範囲＞有機化学，高分子化学，生化学など化学に関する基礎をしっかりと理解していること。また，本教科は高分子化学，有機材料，有機機能材料の学習が基礎となる教科である。 ＜自己学習＞授業で保証する学習時間と，予習・復習（中間試験，定期試験のための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が，90時間に相当する学習内容である。 ＜学業成績の評価方法および評価基準＞適宜求めるレポートの提出をしていなければならない。後期中間，学年末試験の2回の試験の平均点を80%，課題の評価を20%として評価する。ただし，後期中間試験について60点に達していない者（無断欠席の者は除く）には再試験を課すこともあり，その場合，再試験の成績が該当する試験の成績を上回った場合には，60点を上限としてその試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。 ＜単位修得要件＞学業成績で60点以上を取得すること。 ＜備考＞自己学習を前提とした規定の単位制に基づき授業を進め，課題提出をもとめるので日頃の勉強に力を入れること。汎用高分子材料から先端高分子材料までを幅広く取り扱うので化学全般に関する専門基礎事項を必要に応じて確認・復習すること。					
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☒ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	有機材料工学とは		1. 高分子と低分子の特徴についてその概要を説明できる。		
		2週	合成高分子の構造		上記1		
		3週	合成高分子の性質		2. 高分子の熱的性質や力学的性質について説明できる。		
		4週	天然高分子の構造		3. セルロースなど工業的に使われている天然高分子についてその概要を説明できる。		
		5週	天然高分子の性質		4. バイオリアクターおよびバイオリアクターに応用される酵素など生体高分子の概要について説明できる。		
		6週	高分子材料の設計：連鎖重合		5. 高分子材料を設計するための基礎となる各種重合法について説明できる。		
		7週	高分子材料の設計：逐次重合		上記5		
		8週	中間試験		これまでに学習した内容を説明し，諸量を求めることができる。		
	4thQ	9週	分離・認識材料		6. 分離機能材料や分子認識材料の構造と機能について説明できる。		
		10週	バイオマテリアル		7. バイオマテリアルの構造と機能について説明できる。		
		11週	環境問題と高分子材料		8. 環境浄化材料についてその概要を説明できる。		

		12週	生分解性高分子材料	9. 生分解性高分子の構造と機能について理解し、高分子のリサイクルについて説明できる.			
		13週	高分子のリサイクル	上記9			
		14週	プラスチック基複合材料	10. 繊維強化プラスチックの種類や構造等を理解し、成型法についても簡単に説明できる.			
		15週	プラスチック基複合材料の成型法	上記10			
		16週					
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標							
分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週	
評価割合							
	試験	課題	相互評価	態度	発表	その他	合計
総合評価割合	80	20	0	0	0	0	100
配点	80	20	0	0	0	0	100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	環境調和材料	
科目基礎情報							
科目番号	0053			科目区分	専門 / 選択必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	（参考図書）生体機能材料学 赤池敏宏著 コロナ者						
担当教員	黒飛 紀美						
到達目標							
持続可能な人間社会を構築する必要性が理解でき、それに必要な材料の開発に関しての学習を行う。さらに、持続可能な人間社会を目指すには新素材の開発は必須であるため、材料を研究するにあたり必要な知識を習得する。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	持続可能な人間社会の構築が必要な背景を十分理解できる			持続可能な人間社会の構築が必要な背景を理解できる		持続可能な人間社会の構築が必要な背景を理解できない	
評価項目2	リサイクルできる材料について十分理解し説明できる			リサイクルできる材料について理解できる		リサイクルできる材料について理解できない	
評価項目3	持続可能な人間社会に配慮した有害物質フリーの材料について十分理解し説明できる			持続可能な人間社会に配慮した有害物質フリーの材料について理解できる		持続可能な人間社会に配慮した有害物質フリーの材料について理解できない	
評価項目4	省エネ、クリーンな条件で製造できる材料について十分理解し説明できる			省エネ、クリーンな条件で製造できる材料について理解できる		省エネ、クリーンな条件で製造できる材料について理解できない	
評価項目5	持続可能な人間社会に配慮したエコ燃料について十分理解し説明できる			持続可能な人間社会に配慮したエコ燃料について理解できる		持続可能な人間社会に配慮したエコ燃料について理解できない	
評価項目6	持続可能な人間社会に配慮した電子材料について十分理解し説明できる			持続可能な人間社会に配慮した電子材料について理解できる		持続可能な人間社会に配慮した電子材料について理解できない	
評価項目7	生体環境について十分理解し説明できる			生体環境について理解できる		生体環境について理解できない	
評価項目8	材料との生体反応を十分理解し説明できる			材料との生体反応を理解できる		材料との生体反応を理解できない	
評価項目9	生体適合性材料について十分理解し説明できる			生体適合性材料について理解できる		生体適合性材料について理解できない	
評価項目10	血液に接する材料について十分理解し説明できる			血液に接する材料について理解できる		血液に接する材料について理解できない	
評価項目11	ウイルスの検査について十分理解し説明できる			ウイルスの検査について理解できる		ウイルスの検査について理解できない	
評価項目12	PCR装置について十分理解し説明できる			PCR装置について理解できる		PCR装置について理解できない	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	人類は「大量生産・大量消費・大量廃棄」型の社会を構築し、先進国が発展途上国の農産物を安く輸入するといった歪な経済構造を生じさせている。こういった経済格差は何かのきっかけで大暴動を引き起こし、世界経済を停滞させてしまう。そうなると、輸入に頼る我が国においても、輸入が制限され食糧価格が高騰し生活が苦しくなることが予想されている。我々は持続可能な人間社会を目指し、このような貧富の差が生じないよう世界環境に配慮した生活を継続する必要がある、1991年にこのような観点から環境に調和する材料つまりエコアテリアルの学問領域が立ち上がった。授業前半はこういったエコマテリアルの話を取り扱う。持続可能な人間社会を考えると新素材の開発は必須であり、後半ではミクロ的な視点から生体環境に調和した材料についてマテリアルを考える授業を行う。						
授業の進め方・方法	・授業は講義形式で行う。						
注意点	<到達目標の評価方法と基準> <到達目標の評価方法と基準> 中間試験、期末試験を課し、その平均値が60点を合格とする。60点未満の学生は再試が行われ60点以上のものは合格とする。その場合、60点を評価点とする。後半の授業ではバイオマテリアル関連の講義を行います。教科書を揃えなくても聴講可能な授業体系にします。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	持続可能な人間社会を目指して、現在の社会情勢を説明しながら、今後行っていくかなくてはならない政策に関して講義する。		持続可能な人間社会を目指す世界背景が理解できる		
		2週	リサイクルできる材料		リサイクルできる材料について説明できる		
		3週	持続可能な人間社会に配慮した有害物質フリーの材料		持続可能な人間社会に配慮した有害物質フリーの材料について説明できる		
		4週	省エネ、クリーンな条件で製造できる材料		省エネ、クリーンな条件で製造できる材料について説明できる		
		5週	エコ燃料		エコ燃料について説明できる		
		6週	持続可能な人間社会に配慮した電子材料		持続可能な人間社会に配慮した電子材料について説明できる		
		7週	材料開発の重要性		持続可能な人間社会を目指し材料分野で何に注意すればいいのかを説明できる		

		8週	中間試験	1週～7週までの確認試験
	4thQ	9週	生体の環境とは	生体環境について説明できる
		10週	生体反応	生体の防御反応に関して説明できる
		11週	生体適合性材料の種類	生体に適した材料について説明できる
		12週	血液に接する材料	血液に接する材料および血液凝固反応について説明できる
		13週	生体反応を利用した装置（１）	ウイルスの検査に関して必要な材料を説明できる
		14週	生体反応を利用した装置（２）	PCR装置に関して必要な材料を説明できる
		15週	材料開発の重要性	材料開発で考慮しなくてはならない点を説明できる
		16週	期末試験	9週～15週までの確認試験

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
----	----	------	-----------	-------	-----

評価割合

	試験	小テスト	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100
基礎的能力	100	0	0	0	0	0	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度 (2024年度)		授業科目	材料強度工学	
科目基礎情報							
科目番号	0054			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）			対象学年	専2		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	ノート講義。参考書：「材料強靱学」小林俊郎 著（アグネ技術センター），「ホルンボーゲン 材料」小林俊郎他 訳（共立出版(株)），「鉄鋼・高強度化に挑む」内山 郁 著（(株)工業調査会），「入門・金属材料の組織と性質」(社)日本熱処理技術協会 編著（大河出版）など						
担当教員	黒田 大介						
到達目標							
金属材料の組織制御および破壊力学に関する基礎理論を理解し，ミクロ組織制御に必要な専門知識および破壊靱性の評価に必要な専門知識を習得し，高強度・高靱性を有する金属材料の設計・開発に応用できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		代表的な材料の原子構造，結合様式の知識に基づいて，代表的な材料の高強度化の方法を提案できる。		代表的な材料の原子構造，結合様式と高強度化の関係を説明できる。		代表的な材料の原子構造，結合様式と高強度化の関係を説明できない。	
評価項目2		材料力学や破壊力学のパラメータの評価法と概念，種々の破壊形態を説明でき，それらの知識を構造材料の高強度化に応用できる。		材料力学や破壊力学に関する概念や代表的な破壊形態とその原因を説明できる。		材料力学や破壊力学に関する概念や代表的な破壊形態とその原因を説明できない。	
評価項目3		代表的な構造用材料の強化機構を説明でき，それらの知識を構造材料の高強度化に応用できる。		代表的な構造用材料の強化機構を説明できる。		代表的な構造用材料の強化機構を説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	材料強度工学は組織制御というミクロな視点と破壊力学というマクロな視点から材料の強度と靱性の改善を目指す学問である。この科目は国立研究開発法人物質・材料研究機構において金属系構造材料のミクロ組織制御，機械的特性評価ならびに破壊機構解析を専門として研究を行っていた教員がその経験を活かして材料技術者として習得しておくべき主要な実用材料の組織制御法，機械的特性および破壊靱性の評価法について講義形式で授業を行うものである。あらゆる金属材料の強靱化を自力で行える知識と技術の習得が目的である。						
授業の進め方・方法	・すべての授業内容は，学習・教育到達目標(B)＜専門＞に対応する。 ・授業は講義形式で行う。講義中は集中して聴講する。 ・「授業計画」における各週の「到達目標」はこの授業で習得する「知識・能力」に相当するものとする。						
注意点	＜到達目標の評価方法と基準＞下記授業計画の「到達目標」を網羅した問題を中間試験および定期試験で出題し，目標の到達度を評価する。各到達目標に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で，目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。 ＜学業成績の評価方法および評価基準＞ 中間試験，期末試験の2回の試験の平均点を100%として評価する。ただし，中間試験の得点が60点に満たない場合（無断欠席の者を除く）は，補講の受講の後，再テストにより再度評価し，合格点の場合は先の試験の得点を60点と見なす。期末試験の再テストは行なわない。 ＜単位修得要件＞学業成績で60点以上を取得すること。 ＜あらかじめ要求される基礎知識の範囲＞「鉄鋼材料」，「軽金属材料」，「材料強度学」の基礎事項を十分に理解しておくこと。 ＜レポート等＞理解を深めるため，必要に応じて演習課題を与える。 ＜備考＞教科書以外に補助的にプリントを配布し，その内容を講義に含めることがある。						
授業の属性・履修上の区分							
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☒ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業	
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	構造材料の発展と特徴		代表的な材料の原子構造と特徴を説明できる。		
		2週	強さと靱性の基礎－その1－強さ，靱性とは何か		強さや靱性の定義と変形やき裂進展の要因を説明できる。		
		3週	強さと靱性の基礎－その2－金属を強くする方法		金属材料の代表的な強化機構を説明できる。		
		4週	鉄鋼材料の強化と靱化－その1－組織の調整法		元素添加や熱処理による鉄鋼材料の組織の調整法を説明できる。		
		5週	鉄鋼材料の強化と靱化－その2－実用鋼の強靱化		鉄鋼材料の組織と強靱化の関係を説明できる。		
		6週	材料力学と破壊力学		材料力学的手法と破壊力学的手法の違いを説明できる。		
		7週	弾性破壊力学と弾塑性破壊力学		基本的な破壊力学パラメータを説明できる。		
		8週	中間試験				
	2ndQ	9週	鉄鋼材料の破壊とその評価法－その1－延性破壊と脆性破壊		延性破壊と脆性破壊の特徴とその評価法を説明できる。		
		10週	鉄鋼材料の破壊とその評価法－その1－靱性と疲労破壊		疲労破壊とその評価法を説明できる。		
		11週	鋳鉄の強化		鋳鉄の種類とその強化法を説明できる。		
		12週	アルミニウム合金の強度		アルミニウム合金の種類とその強化方法を説明できる。		
		13週	チタン合金の強化		チタン合金の種類とその強化方法を説明できる。		
		14週	金属基複合材料の強度		金属基複合材料の製法と強度の関係を説明できる。		
		15週	金属間化合物の強度		金属間化合物のミクロ組織と強度の関係を説明できる。		

		16週		
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標				
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル 授業週
評価割合				
	試験	課題	相互評価	態度 発表 その他 合計
総合評価割合	100	0	0	0 0 100
配点	100	0	0	0 0 100

鈴鹿工業高等専門学校		開講年度	令和06年度（2024年度）		授業科目	特別講義
科目基礎情報						
科目番号	0060		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	総合イノベーション工学専攻（環境・資源コース）		対象学年	専2		
開設期	集中		週時間数			
教科書/教材	教科書：指定しない					
担当教員	山口 雅裕,近藤 邦和					
到達目標						
集中講義やeラーニングなどの形式によって，特別講義が開講されることがある．創造性豊かな実践的技術者として将来活躍するための基礎的な知識と技術および生涯にわたり学修する力を身につけた人材を養成する授業である．						
ループリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1						
評価項目2						
評価項目3						
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	対象とするテーマ，学修の内容において，基礎的な知識と技術および学修する力を身につける．					
授業の進め方・方法	授業は集中講義などの形式の他に，多様なメディアを高度に利用して，教室以外の場所で行うことができるものもある 特別講義を開講する場合は，指導教員より開講計画書が提示される．学生は所定の期日までに特別講義履修申請書を学生課教務係に提出するものとする．履修申請に基づき，指導教員が受講者を選考する． 成績評価は，学業成績評価基準により行う．					
注意点	単位数については，専攻科においては講義の15時間の履修を1単位として計算するので，専攻科1年次あるいは2年次の1年をとおして30時間の履修で2単位とする．ただし，他の授業と同じ内容で重複して単位を修得することはできない． 授業を行う期間は，35週にわたることを原則とする． 授業を休業期間中に集中講義形式で行うことができる．学年末休業期間中に特別講義を開始する場合は，特別講義の単位を含めることなく課程修了が認められる場合に限られるものとし，単位修得の学年は，当該学年とする．					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☐ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	テーマ，学修の内容は，開講計画書で提示される．	1. 対象テーマにおいて，基礎的な知識と技術を身につける．		
		2週		2. 生涯にわたり学修する力を身につける．		
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	2ndQ	9週				
		10週				
		11週				
		12週				
		13週				
		14週				
		15週				
		16週				
後期	3rdQ	1週				
		2週				
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	4thQ	9週				
		10週				
		11週				
		12週				
		13週				
		14週				

		15週		
		16週		
モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標				
分類	分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル 授業週
評価割合				
		学業成績評価基準	合計	
総合評価割合		100	100	
配点		100	100	